

伊東マンシヨの生涯について

高田重孝

【伊東マンシヨ生涯年表】

- 1565年 府内のキリシタンたちが大量に臼杵へ移住
宗麟、イエズス会に丹生島城前の土地を寄進、
8月 *臼杵教会(永祿の教会)は1565年8月に完成(フィゲレイド神父在中)
- 1570年 伊東氏居城都於郡(とこのうり)城(現西都市)奥之院にて誕生
- 1577年12月 伊東氏、薩摩軍に敗れ、大友宗麟を頼り豊後に落ち延びる
- 1578年 1月18日 豊後野津*到明寺【キリシタン寺】をあてがわれて落ち着く
野津の『リアン』が洗礼を受け、野津で100名以上がキリシタンになる
8月28日 大友宗麟、臼杵教会で洗礼を受けドン・フランシスコと称する
11月12日 大友宗麟、高城の戦いで敗北、12月10日耳川の戦いで敗北
- 1579年4月 大友宗麟、伊東義佑(三位入道)佑兵一行たちを道後へ逃がす。伊予国・河野氏は宗麟の次姉の嫁ぎ先であり、宗麟は河野氏に伊東氏の保護を託したと考えられる
- 1578~79年頃? 野津の『リアン』が自宅敷地内に教会を建て、その裏山に大十字架と下藤村のキリシタンのために広く良く整った墓地を整備する【下藤地区キリシタン墓地】
*臼杵教会に日本初のポジティブオルガンが設置される
マンシヨ受洗後に府内の教会学校【仮のコレジオ】に入る
(洗礼名・マンシヨとは、ポルトガル、エヴォラの街の殉教者の名前)
- 1580年 巡察師ヴァリニャーノが臼杵に滞在、豊後地区のイエズス会士が臼杵教会に集合して協議会を開催する。
- 1580年4月 有馬のセミナリヨ開校、第1期生として伊東マンシヨ等22名入学
12月 臼杵に修練院【ノビシャード】が開校して12名が入学する
- 1581年 宗麟、臼杵に日本でもっとも美しい教会堂(天正の教会)を建設する
府内にコレジオ【学院】が開校する

【天正少年遣欧使節の旅】

- 1582年2月20日 天正遣欧使節団一行10名、長崎港を出港
- 1584年8月10日 リスボン到着
- 1584年9月14日 ポルトガル、エヴォラ大聖堂に於いて大オルガンを伊東マンシヨ、千々石ミゲルが演奏して喝采を浴びる。
- 1585年3月23日 ローマ・パチカンにてグレゴリオ13世教皇に謁見、3種類の服を賜る
- 1586年4月12日 リスボン出港、帰路に着く
- 1590年7月28日 長崎に帰国
- 1591年3月3日 京都聚楽第にて関白・豊臣秀吉に拝謁、謁見の後、御前演奏をする

【イエズス会入会・修練期間】

- 1591年7月25日 天草河浦町にあった天草コレジヨに入り、正式にイエズス会に入会する
- 1591年～1597年 天草修練院、コレジヨでの学び
- 1592年7月 従兄弟の伊東義賢バルトロメオと弟伊東祐勝ゼロニモの死去
- 1594年 母町の上の要請で飢肥に伝道する**
- 1598年～1600年 長崎での修練と奉仕
- 1601～2年頃千々石ミゲル、イエズス会を退会する

1601年～1604年（夏に帰国）

マカオのコレジヨに留学、倫理神学を3年間学ぶ

- 1605年 長崎教会での活動『サクラメンタ提要』出版
- 1606年秋 中浦ジュリアン、伊東マンショ、原マルチノ、長崎で副助祭になる
伊東マンショ・有馬のコレジヨでのラテン語と音楽の助教授
中浦ジュリアン、都・京都の教会レジデンシアにおいて奉仕
原マルチノ、長崎の教会で秘書・通訳の奉仕
- 1607年 中浦ジュリアン、伊東マンショ、原マルチノ、助祭になる

【神父としての奉職】

- 1608年
司祭に叙階される。 伊東マンショ神父、小倉教会へ赴任奉職
中浦ジュリアン（41歳）博多の教会へ赴任奉職、原マルチノ、長崎の教会で秘書として活動
- 1609年 斉藤アンデレ修道士、長門・周防へ伝道に出かける
- 1610年 伊東マンショ神父、斉藤アンデレの案内で長門周防へ伝道に出かける
- 1611年 郷里日向・飢肥に伝道する**
- 1611年12月 豊前の責任者セスペデス神父脳卒中で急死。細川忠興、宣教師を追放
マンショ、小倉にコンフラリア（信徒組織）を組織して、信徒の相互扶助を確立する
マンショ、細川忠利を頼り中津教会に於いてクリスマスを祝う
マンショ、中津にコンフラリア（信徒組織）を組織して、信徒の相互扶助を確立する

【死去】

- 1612年11月13日
長崎のコレジヨに於いて死去、原マルチノ、メスキータ神父が看取る
死因：肋膜炎【胸膜炎】『被昇天のサンタ・マリア教会堂の内に埋葬』される。

【天正少年遣欧使節帰国後の活動】

伊東マンシヨ生涯年表	1～2 頁
目次	3 頁
活動解説	
帰国後のイエズス会入会	4 頁
天草河内浦の天草コレジオにおいて学ぶ	4 頁
1592 年、従兄弟の伊東義賢バルトロメオと弟伊東祐勝ゼロニモの死去	4 頁
1594 年の飢肥伝道について	7 頁
マカオ留学	7 頁
神父として奉職	8 頁
豊前教会の成立	8 頁
小倉教会の柱石・加賀山隼人	9 頁
小倉教会の成立	10 頁
小笠原玄也と小倉教会・伊東マンシヨ神父の小倉教会への赴任	10 頁
長門周防への伝道	11 頁
伊東マンシヨ神父に報告された長門周防の現状　メルキオール熊谷元直一族の殉教	13 頁
盲目の伝道師ダミアンの殉教	14 頁
神父達の伝道の苦勞	15 頁
萩と山口への伝道と信徒組織の構築	17 頁
日向・飢肥への伝道	17 頁
豊前におけるキリシタン迫害	19 頁
セスペデス神父の突然の死去	20 頁
細川忠興の神父追放令　小倉中津での信徒組織の再構築	22 頁
小倉・中津での信徒組織の再構築	22 頁
コーロス徴収文書に記載された小倉中津の信徒代表者達	23 頁
伊東マンシヨ神父の死去	25 頁
伊東マンシヨ神父の死亡原因の考察	25 頁
宣教師と煙草（たばこ）との関係	27 頁
伊東マンシヨ神父の遺骨の行方について	28 頁
メスキータ神父の死去	29 頁
小笠原玄也・みやの信仰と信頼	34 頁
永遠に繋がる聖なる歩み・伊東マンシヨの生涯	34 頁
中浦ジュリアン神父の殉教	35 頁
伊東マンシヨの府内在住の場所・府内の教会参考跡地(参考文献)	35 頁

【伊東マンショ、天正少年遣欧使節帰国後の活動】

【イエズス会入会と修練の時代】

1591年7月25日 天草河浦町の天草コレジヨに入り正式にイエズス会に入会する

修練院長 コンファロニエロ (Celso Confaloniero・1586年来日～1614) 神父

院長 カルデロン (Francisco Calderón・1585年来日～1614) 神父

副院長 メスキータ (Diego de Mesquita・1577年来日～1582, 1590～1614) 神父

* 神父たちの人柄

院長・カルデロン神父 (Francisco Calderón・1585年来日～1614)

賢明に教え子たちの心に純粋な徳を持って養い、日本の教会の救いであるイルマンたちを育てるために力を尽くした。

副院長・メスキータ神父 (Diego de Mesquita・1577年来日～1582, 1590～1614)

常に暖かい心を持って自分の子供のように可愛がっていた4人の使節たちとその仲間の側に立ち、いつも彼らの見方になり彼らを擁護した。

修練院長・コンファロニエロ神父 (Celso Confaloniero・1586年来日～1614)

『日本人のイルマンたちが徳においても、学問においてもその発展に、私があまり期待できないのは、色々の理由の中で次の点があります。この国に人には、ある一つの自然的だらしなさ、すべての実行において気力が足りないところが見られます。これは多分、信じられないほどの貧しさや栄養の無い食物の結果であり、体の弱さから起こるものかもしれません。その同じ理由で彼らが情欲を抑えるために、そんなに困難を見出さないとします。つまり悪をするためにも、善を行うためにも弱いのです。』

コンファロニエロ神父の日本人に対して抱いている偏見に満ちた考えは、天草の修練院時代から終生変わらずに、後に長崎に於いて日本人イルマンたちが司祭になることに反対する宣教師派のリーダーとして、マンショ、ジュリアン、マルチノたちにとって、司祭になるための意味のない遅延は彼らの心に大きな悲しみを与え大きな試練の原因になった。

司祭になったマンショ、ジュリアン、マルチノの3人は、コンファロニエロが疑問視した問題点に対して、病死、殉教、任務貫徹と言う自分に与えられた生涯を持って答えた。

3人が生涯をかけて証明したのは、コンファロニエロの生涯よりも、遥かに厳しい試練の中で命を懸けてキリストに従い雄々しく生涯を歩み終えたことであった。

1592年秋、真面目に修練期の生活を送る4人の使節たちについて、3人の修練院の責任者たちの意見は一致していた。『マンショ、ミゲル、ジュリアン、マルチノは大変良くやっている。』

1592年、従兄弟の伊東義賢バルトロメオと弟伊東祐勝ゼロニモの死去について

(ローマに赴いた伊東ドン・マンショの従兄弟で日向の本来の国主なる伊東ドン・バルトロメウと(伊東義賢・よしかた)その兄弟ゼロニモ(伊東祐勝・すけかつ)が、朝鮮から病気で帰

り逝去した次第)

『日向国主の息子で、豊後国主の甥にあたるこれら2人の殿は、まだ幼い頃に、薩摩国主が強大な権力を持って日向に侵入し、日向国を没収した時に、父が亡くなっていたので、母と共に豊後の国に逃れた。それは母が(豊後)国主フランシスコの一姉妹の娘である縁故があったからである。既述のようにこれら2少年は伯叔父の国主フランシスコの勧告によって、豊後でキリシタンになった。長男は日向国の継承者で、伊東ドン・バルトロメウ、次男は伊東ドン・ゼロニモと呼ばれた。この次男は9歳か10歳の時に、豊後の国主フランシスコが巡察師(ヴァリニャーノ)に当時(織田)信長の主城であり城下町である安土山に設置されていた神学校に連れて行ってもらいたいと言って彼に託したのであった。ドン・ゼロニモはそこで数年過ごしたが、自分の嗜好が教会での勉強よりも戦いや武術の方に向いていたし、また関白が薩摩を制圧して後、下の諸国の分配にあたって、日向国の半分を、ドン・バルトロメウ、ドン・ゼロニモ兄弟の姉と結婚している、同じ伊東一族で、彼らの義兄にあたるある殿(伊東民部大輔祐兵・すけたけ)に与えたこともあって、彼とその兄はこの義兄のもとに身を寄せることになった。その地でその義兄は、兩人に身分相応の生活ができるだけの土地の収入を与えた。それからまもなく関白のキリシタン宗門に対する迫害が始まり、その地に司祭を呼ぶことも、彼らの領地のその地方で改宗事業を行うこともできなかったが、この義兄(祐兵・すけたけ)もまたキリシタンであったので、彼は幾人かの親族と家臣をキリシタンにした。ドン・ゼロニモは、我らの同僚である伊東ドン・マンショの姉妹で、彼の従姉妹にあたる女性と結婚した。ドン・マンショが巡察師とともに都に赴いた時には、彼ら一同はドン・マンショと大きい喜びのうちに出会ったのである。

それからしばらくして、彼らもまたすべて太閤様の命令で朝鮮に行った。ところでドン・バルトロメウ(27歳)もドン・ゼロニモ(24歳)も、同時ではなかったが発病した。ドン・ゼロニモは病んだことを感じ、すでにドン・マンショの勧めによって、出陣に際して総告白をしてはいたけれども、告白せずに死にたくなかったので、義兄(祐兵)の許しを求め、告白し養生する目的で乗船し日本に向かった。ところが激しい嵐に遭って、山口の国に属している***長門の国のある港(山口県豊北町(豊浦郡)肥中浦の港)**に到着した時、彼の病気はすでにひどく悪化していて、そこから先へは進むことができなかった。でも彼は絶え間なく、家来たちに向かい、司祭に告白をしたいとの強い希望を語っていた。そして深い愛情をこめて、しばしば己の罪の許しを我らの主なるデウスに願った。しかしそこにはまったく異教徒の土地であったから、他に施す術もなく、両眼を天に向け、手でたびたび胸を打ちながら、自分にできうる限り、デウスの御前に己が罪を告白した。彼と同行してきた家来のうちには数人の異教徒がいたので、彼は彼らに、他の話の中で次のように語った。

『もし汝らが、デウス様と真の救霊ということで予と同様の知識があり、また持ち得たならば、汝らはそれを求めるためにまったく別の配慮をなすことであろう。そしてキリシタンとなり、予が、今置かれている臨終に際しては救いの希望が持てるように生きるに違いない。しかるに汝らは、今は異教徒であり、信仰の灯を欠く生活をしているから、救いを得ることができない。』

と。

ドン・ゼロニモはまた、自分の死後はキリシタンの様式に従って、日本人がふつつ行うように坐してではなく、顔を天に向け身体を伸ばして埋葬するように、また枕元には十字架を置くように命じた。また彼は、自分の乗船は、司祭たちがいる最初の教会に与え、同時に 50 タイスを教会に渡し、自分の靈魂のために祈ってもらいたいと願うようにと命じた。

ドン・ゼロニモの遺骸は天草の学院（河内浦）に運ばれた。家臣の異教徒たちは、彼が生前に語った色々なことをそこで打ち明けたが、彼が信心と敬虔さのうちに息をひきとったことに驚嘆していた。彼は戦争で捕虜にした男女を混じえた様々の朝鮮人を連れて来ていたが、その人々を次のように遇するように命じていた。『男子の捕虜は、すべて伴天連様方のその身を委ね、伴天連様方の御指示に従わせるように。そして女子の捕虜は予の妻に渡すがよい。それは捕虜として所有するためではなく、その女子らが、自分で交渉し、日本語が話せるようになり、日本で何らかの生活手段を講じ得るまで、予の家で養うためである。その時が来れば彼女たちに自由を与えるがよい。彼らは異国の人たちだし、また日本語を話すことができないから、今すぐ放免したら、すぐにも身を滅ぼし捕らえられるであろうから、そうしてはならない。』と。さらに彼は、妻と親族の人たちに、キリシタンとして立派に暮らすよう切に依頼するところがあった。そして異教徒たちの中で過ごせば、なおさら立派に、靈魂のことに気を配って生きねばならないと命じた。

彼はまた、いっしょにいた異教徒の家臣たちに『もし汝らが、予の臨終に際して予を喜ばせたいと思うのなら、すでに幾人かはキリシタンになる決意をしているが、全員がそのように決意せよ』と言った。その家臣たちが『殿の領地、ならびに殿の姫君に関しては、いかなる命令をお与えになりますか』と訊ねると、彼はこう言った。『予の領地に関しては義兄が善処いたすであろう。予の幼い娘については、母親や親族がいることだし、その人たちが娘の面倒を見るであろう。予は、己の靈魂の救いに関することのほか、何も考えてはおらず、それ以外のことは念頭に浮べさせないでほしい。』と。

彼はついに、救霊の大いなる印しをもってその靈魂をデウスにお返しした。（7月14日）彼において、信仰の種子と、神学校で受けた立派な教育がいかに役立つものであったかが良く示された。彼は、当時はまだ子供であったし、神学校では十分な教育を受けることができなかったが、後になってそれは芽をふき、幾年もの間、司祭に会うことなく異教徒の中で過ごしながらも、大いなる救霊の希望のうちにその生涯を閉じたのであった。

ドン・ゼロニモが死去した少し後に、他の経路からその兄ドン・バルトロメウ（27歳）が重篤の身で日本に帰ってきた。彼は*雪ノ島（壱岐の島）から先には進むことができず、他の詳細な事情は判らないが、その島で彼が死去したことを我らは知った。（7月21日）

ドン・バルトロメウ、ドン・ゼロニモ二人の死により、伊東マンショは、自分が世を捨て、その道教たちとともに聖なる修道生活に入り、デウスに奉仕するように取り計らい給うた主なるデウスの御恵みがいかに偉大なものであるかを今更のように深く悟ったのである。』

『フロイス・日本史 12、大村純忠・有馬晴信編』253～257頁、第110章（第3部43章）

中公文庫

*長門の国のある港・山口県豊北町（豊浦郡）肥中浦の港にて死去
伊東祐勝ドン・セロニモ・24 歳、1592 年 7 月 14 日、死去

*壱岐の島 長崎県壱岐市芦辺町瀬戸浦にて死去、長徳寺に埋葬。日向大明神として祀られている。伊東義賢ドン・バルトロメウ・27 歳、1592 年 7 月 21 日、死去

【イルマン・伊東マンシヨ郷里飢肥に伝道する】

1594 年・伊東マンシヨ、マンシヨの母・町の上の要請で飢肥に伝道する

『何年か前にローマに行った 4 貴人の 1 人であるイルマン伊東マンシヨの親戚の地である日向にまた宣教の旅があった。イルマンの一人がその地に行ったのは、イルマン・マンシヨの母の願いがあったからである。マンシヨの従兄弟でありキリシタンであるその地の殿さまは、全貴人を連れて高麗に渡ったため、彼らがいたとすれば期待できた結果が得られなかったが、そこにいたキリシタンに要理を教え、異教徒の中から新しく 67 人がキリシタンになった。』

1594 年の報告、フランシスコ・パシオ神父の手紙、天理大学復刻版より

1598 年～1600 年 長崎での修練と奉仕

1601～2 年頃 千々石ミゲル、イエズス会を退会する

1601 年～1604 年（夏に帰国）

1601 年、中浦ジュリアンと共にマカオのコレジヨに留学、倫理神学を 3 年間学ぶ。この地で、生涯を共にするカミロ・コンスタンチオ神父(イタリア人・ナポリ出身)と出会い親友になる。日本人の同級生に結城ディオゴ、石田アントニオ、小田アグスティノ、野間アンドレスがいる。ポルトガル人の学生の中に、キリストバル・ファン・フェレイラ【中浦ジュリアンと共に穴釣りの刑の処せられて転んだ神父】ベント・フェルナンデスがいた。修道者としての生涯の中で一番静かで平安な時期であった。ヴァリニャーノのマカオでの日本人を学ばせる目的は 2 つ。『神学をより深く学ぶことと、神学の学びを通して日本人とヨーロッパからの宣教師たちが一致協力して、将来日本で共に働く準備をすることができるようになること』であった。ヴァリニャーノはマカオに 1603 年に戻り、マンシヨとジュリアンは 1604 年の夏に日本に帰った。マカオでは約 1 年、ヴァリニャーノと共に生活することができた。自分たちの運命を決めた人との最後のひと時であった。ヴァリニャーノは 1606 年 6 月 20 日、マカオで死去して、マードレ・デ・デウス教会の中央祭壇の下に葬られた。

1605 年 長崎教会での活動『サクラメンタ提要』出版

1606 年秋 中浦ジュリアン、伊東マンシヨ、原マルチノ、長崎で副助祭になる
中浦ジュリアン、都・京都の教会レジデンシアにおいて奉仕

伊東マンショ・有馬のコレジヨでのラテン語と音楽の助教授
原マルチノ、長崎の教会で秘書・通訳の奉仕

1607年 中浦ジュリアン、伊東マンショ、原マルチノ、助祭になる

【神父としての奉職】

1608年

司祭に叙階される。 伊東マンショ神父、小倉教会へ赴任奉職

中浦ジュリアン(41歳)博多の教会へ赴任奉職、原マルチノ、長崎の教会で秘書として活動。

【豊前教会の成立】

豊臣秀吉の九州征伐が終わった1587年(天正15年)、キリシタン大名シメオン黒田孝高(如水)が豊前六郡に領地を賜り、豊前中津に居を定め築城を開始した。同年3月、黒田孝高の感化により豊前中津に於いて、大友宗麟の嫡子・義統(ドン・コンスタンティーノ)、毛利(小早川)秀包(シメオン)、妻は宗麟の七女・マセンシア、毛利家家臣、熊谷元直(メルキオール)、黒田利則、黒田直之(ミゲル)、黒田長政(ダミアン)が受洗した。

1599年(慶長4年)10月、黒田孝高(如水)は豊前中津にセスペデス神父を招いてイエズス会の修道院・教会を作らせ宣教を開始した。

1600年(慶長5年)9月15日、関ヶ原の戦いの後、黒田孝高(如水)は嫡子・黒田長政に与えられた福岡に移り、換わって同年12月、細川忠興が丹後国宮津より豊前中津に移封してきた。関ヶ原の戦いの少し前、7月17日、大坂玉造の細川邸を石田三成の軍勢が包囲して、忠興の妻、ガラシャ夫人を人質として差し出すように要求した。小笠原玄也の父、小笠原少斎は、忠興の言い付けた命令に従い、ガラシャ夫人を介錯した後、屋敷に火を放ち殉死している。自殺を禁じているキリシタンの教えを守りながら、夫・忠興の意思に殉じたガラシャ夫人の壮烈な死は、忠興に衝撃と深い感動を与えた。また、オルガンティーノ神父はガラシャ夫人の遺骨を拾い、堺のキリシタン墓地に葬ったが、関ヶ原の戦いの後、忠興の願いによって盛大な葬儀ミサが行われた後、ガラシャの遺骨は忠興が細川家菩提寺・崇禅寺に改装した。葬儀と埋葬をしたオルガンティーノ神父に対して、忠興は深く感謝するとともに、深い尊敬の念を抱いた。セスペデス神父はガラシャ夫人をはじめ、細川忠興の弟・細川興元、忠興の長女・お長、次男・興秋、次女・お多羅をキリシタンに導いた。これらの人々の改宗に重要な役割を果たしたことによって、細川家とはきわめて深い繋がりがあった。忠興のセスペデス神父に対する感謝は尽きることなく、そのまま豊前中津に留まるように要請し、亡き妻ガラシャ夫人の毎年の追悼ミサを依頼している。

大坂玉造の細川邸：

現大坂中央区玉造 2、カトリック大坂カテドラル聖マリア大聖堂が細川邸屋敷跡に建っている
崇禅寺：

現大阪府東淀川区中島 5、曹洞宗に属する細川家菩提寺

1600年（慶長5年）7月17日、ガラシャが死んだ翌日、18日、オルガンティーノ神父は玉造の細川邸の焼け跡から焼け残った遺骨を拾わせて堺のキリシタン墓地に葬ったが、関ヶ原の戦いの後、忠興の願いにより盛大な葬儀ミサが行われた後、忠興が菩提寺である崇禅寺に改葬した。

小倉に於いては『細川公の時東曲輪巨過橋に西向うに泰勝院（細川幽斎菩提寺）泰巖寺（織田信長公を祀る）秀林院、以上三ヶ寺相並であり細川公の建立也、細川公肥後に国替えの際。右の三ヶ寺共に移りしが秀林寺はその後断絶せり』小倉市誌上（48頁）

1610年（慶長15）8月20日、細川忠興の父、細川幽斎（77歳）が京都で亡くなった。同年、9月18日、小倉に於いて盛大に仏式で細川幽斎の葬儀が執り行われた。翌年、1611年（慶長16）2月、小倉教会の真近く北側3軒隣（現・北九州市立医療センター、馬借町）に、忠興の亡き父・細川幽斎のために菩提寺・泰勝寺を建立している。小倉教会の北隣には細川忠興の妻・玉ガラシャの御廟、秀林院が建っていた。

1632年（寛永9年）三代忠利が熊本に移封後、秀林院は断絶していた。1637年（寛永14年）泰勝寺（現・立田山自然公園内）を建てて祖父母の泰勝院（幽斎）・光寿院、母秀林院伽羅紗の墓を造った。1645年（正保2年）四代光尚のとき、祖父・忠興が八代城で死去したので、妻ガラシャの横に忠興の墓を建てた。

【小倉教会の柱石・加賀山隼人】

セスペデス神父が豊前・中津で働き始めた頃、小笠原玄也の妻みやの父であるディエゴ加賀山隼人は中津郊外の下毛郡の奉行をしていて、セスペデス神父と共に教会を立ち上げるために働いていた。加賀山隼人はシモン清田朴斎と共に『教会の柱石』と称えられるほど豊前に於ける信徒の中心だった。加賀山隼人の長女、みやは後に小笠原玄也の妻になる。

*【加賀山隼人ディエゴ（54歳）の殉教】

1619年10月15日、小倉にて斬首・殉教。

1566年、摂津国高槻に生まれた。幼い頃、高槻のセミナリオで学び、10歳の時、ルイス・フロイス神父から受洗した。イエズス会の同宿として安土のセミナリオで学んだが、武士の道を選び高山右近に仕えた。17歳の時、山崎の戦いで功を挙げ勇名を広めた。1587年、豊臣秀吉の禁教令で高山右近が改易された時、22歳の隼人は、右近の親友でキリシタン大名の会津若松の蒲生氏郷に仕えた。氏郷が病死したとき、当時丹波にいた細川忠興に召し出され仕える様になった。戦いで数々の功績をあげ、関ヶ原の戦いでは抜群の功績をあげた。忠興の信頼も厚

く、中津に転封された時は2千石を賜り、下毛郡の奉行に任ぜられ6千石を与えられた。セスペデス神父と共に中津教会を始め、豊前の国の布教に尽力して約3千のキリシタンが受洗した。信徒組織・コンフラリアを組織してキリシタン同士の相互扶助に勤め、豊前における信仰の中心人物的存在であった。大坂の夏の陣では、3番隊鉄砲隊を率いて活躍した。大阪落城後、2代将軍徳川秀忠は禁教令を強く打ち出した。有能な家臣、加賀山隼人を失いたくなかった忠興は、隼人と隼人の娘婿の小笠原玄也に棄教を強く迫ったが、彼らの信仰の強さを見た忠興は、彼らから役職と知行を取り上げ、家族別々に小さな家に幽閉した。隼人一家は小倉の御船蔵、小笠原玄也一家は香春町採銅所に幽閉された。

【細川忠興と小倉教会の成立】

1602年（慶長7年）細川忠興が交通の要衝の地小倉に移り、新たに城を構えたのに伴い、教会も活動の場を小倉に移した。

1603年（慶長8年）のガラシャ夫人の追悼ミサ後、忠興は27人の死刑囚に恩赦を与えた。許された27人は洗礼を受けキリシタンになった。このほかに、教会に多額の献金や寄付をして、忠興はキリシタンの良き理解者と保護者になっていった。

セスペデス神父を中心に加賀山隼人と清田朴斎が教会活動として最も実践したのが、『慈悲』すなわち、貧困に喘ぐ人達への援助、病人の救済と養護、癩病人の収容だった。キリシタンのなかから、ミゼリコルジアの組長、および組員達が決められ、集められた寄付金は、貧乏な寡婦や孤児、病人、その他の貧しい人達に配布された。ミゼリコルジアの組員達は貧しい身ではあったが慈悲の業や慈善事業を好んだので、小倉の街外れに癩病患者達の家を作った。また、孤児院を教会の中に設け、孤児達を保護し養育していた。

1606年（慶長11年）司教ロドリゲスの『イエズス会年報』には、小倉には2つの教会があり、グレゴリオ・デ・セスペデス神父、イルマン（修士）ジョアン・デ・トーレス、斉藤アンドレ（日本人）が居て、宣教に従事していた。

1607年（慶長12年）二月、カミロ・コンスタンチオ神父が加わり、10月には、イルマン（修士）ディオゴ・ペレイラが来て、5人の宣教師が小倉教会の宣教を担っていた。

小笠原玄也と小倉教会

小笠原玄也の父・小笠原少斎は大坂玉造の細川邸に於いて、細川忠興の妻・ガラシャ夫人を介錯したのち殉死した。小笠原少斎の適切な処置により細川家は安泰であり、以後、忠興は少斎の遺族に対して手厚く報いている。少斎の長男・長元には細川忠興の姪・おたねを妻として与え、重用して家老職（後6000石）を務めさせている。長元の長男・長之には忠興の弟・細川休斎の娘・こまんを養女にして与えた。少斎の次男・長良（600石）には忠興の妹・おせんを嫁がせている。三男・小笠原玄也（600石）には、忠興の寵臣、加賀山隼人の長女・みやを同じキリシタンとして選んでいる。小笠原玄也は細川忠興の小姓を務めながら、妻みやと共に教会に出席している。みやの父、加賀山隼人（6000石）の下で、教会のためにも働いていたと

われる。『イエズス会年報』を精細に比較して調べていくと、おそらく二人の結婚は1607年頃と考えられる。一六〇八年に長男・源八郎、1610年に長女・まり、1611年に次女・くりが小倉に於いて生まれている。

【伊東マンシヨ神父の小倉教会への赴任】

1608年（慶長13年）司祭に叙階された伊東マンシヨ神父（38歳）がセスペデス神父の伴侶（助司祭）として小倉に赴任してきた。伊東マンシヨ神父は教会の柱石である加賀山隼人、清田朴斎達と共に働き、イエズス会『1610年度日本年報』には、『豊前の城下小倉には、10人のイエズス会員がいた。長岡（細川忠興）殿もその子内記（細川忠利）殿も、いたく同情を寄せていた。その所には2千人の受洗があった。』と報告されている。また、忠興の嫡子『細川忠利が中津の教会のすべての費用を負担している。』と述べている。

1608年（慶長13年）中浦ジュリアン神父（39歳）は、伊東マンシヨ神父とともに司祭に叙階され博多教会に赴任して、筑前、筑後、秋月教会などを巡回して指導していた。中浦ジュリアン神父は伊東マンシヨ神父を訪ねて小倉に来ている。その時、加賀山隼人、清田朴斎、小笠原玄也達を知り、それ以来、中浦ジュリアン神父は小笠原玄也と共に信仰と人生を歩む同胞となった。後年、小笠原玄也一家の信仰を支えたのは中浦ジュリアン神父だった。

【長門・周防への伝道】

イエズス会の指導者達、及び九州地区管区長セルケイラ司教達は、長門・周防、九州の東部、豊後及び日向領で新たに布教を始めようと考え、その重責を伊東マンシヨ神父に託した。交通の要衝、小倉は地理的位置により優れた宣教地だった。北には下関海峡を挟んで、かつてフランシスコ・ザビエルが初めて日本にキリスト教を広めた山口（長門・周防）があり、南には元キリシタン大名・大友宗麟の領地・豊後、及び伊東マンシヨ神父の故郷・日向の国があった。小倉教会の巡回地域として、長門・周防が属していた。1600年代、フランシスコ・ザビエルが山口で福音を述べ伝えてからすでに50年は経過しているので、信徒組織の指導者達は2世、あるいは3世へと代わりををしていたと推測される。また他の土地から山口に移ってきた信仰の勇者（武士や医者等の知識階級の人々）が山口の信徒組織の指導者となっている。さらに10年後（ザビエルが山口に福音を伝えてから60年後）1609年、カミロ・コンスタンチオ神父はアンデレ斎藤修道士と共に長門・周防（山口・萩）へ伝道に出かけた。コンスタンチオ神父の長身で容姿端麗な姿から一目で神父と判り、殺害の危険に晒（さら）されるため、アンデレ斎藤はコンスタンチオ神父の身の安全のため小倉に返し、一人ですべての伝道計画を引き受けその地方を巡回して多くのキリシタン達に慰めを与え、その年の伝道計画を成功に導いている。次の年1610年、カミロ・コンスタンチオ神父に代わり、小倉教会に於けるただ一人の日本人司祭、伊東マンシヨ神父が長門・周防に宣教の巡回に出た。前年の経験を生かしてアンデレ斎藤が伊東マンシヨ神父の道案内をして長門・周防地方のキリシタン達を訪れ、慰めを与え、告

解を聴き、秘蹟を授け、ミサに与らせている。差し迫った迫害に備えるために周防国、岩国 5 名、周防国、玖珂 4 名、長門国、萩 8 名を指導者に任命して、信徒組織・コンフラリアを構築した。(1617 年、コーロス徴収文書より)

【1617 年・元和 3 年、コーロス徴収文書による記録】

コーロス徴収文書とは 1617 年(元和 3)9 月 7 日周防国・岩国。9 月 3 日周防国・玖珂(くが)、8 月 18 日長門国・萩。3 つの町のキリシタン代表者達がイエズス会日本管区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、岩国 5 名、玖珂(くが)4 名、萩 8 名の指導者の名前が記録されている。

周防国、岩国のキリシタン代表者の名簿 5 名 1045～1046 頁

小笠原はうろ、小笠原いなしよ、竹田了悟、西沢平とろ、平野志門。

小笠原アンドレ【アンドゥレース】元は豊後大友宗麟の家臣で、豊臣秀吉の九州征伐(1587 年)前後に大阪に移住。キリシタン大名アウグスティニョ小西行長に仕官して、キリシタン大阪信徒組織の中心人物になっていた。小笠原アンドレ夫人のアガタが天正年間(1573～1591)に孤児救済事業を始めた。細川ガラシャ夫人に仕えていた清原マリアも細川ガラシャと共にこの事業に参加、受洗後ガラシャは積極的に細川亭邸内に数名の孤児を引き取り養育していた。小笠原アンドレがいつから薩摩・島津家久に仕える様になったかは不明。おそらく 1600 年の肥後から薩摩への避難後に、島津家久に気に入られて仕える様になったと推測される。アンドゥレース小笠原は 1609 年 4 月に島津家久によって薩摩から追放されたが 1616 年のキリシタン史に再び現れる。岩国で吉川弘政につかえていた。その年の 12 月、一人の宣教師(石田アントニオ神父)が彼の家で御降誕の祝日のミサを捧げた。1617 年のコーロス徴収文書に署名した岩国のキリシタン代表者の中にパウロ小笠原、イグナチオ小笠原がいた。

* 『芸備のキリシタン史料』426 頁 H・チースリク著

周防国、玖珂(くが)のキリシタン代表者の名簿 4 名 1046～1047 頁

繁沢志摩守阿くす地いの、蒲生路蓮そ、野村流いす、飯田こる弥りよ。

筆頭に署名している「繁沢志摩守阿くす地いの」とは、阿川毛利家二代目・毛利(元繁沢)志摩守元景であり、元景の妻・マルガリタは毛利秀包(1567～1601 年)と大友宗麟の娘マセンシアの間に生まれた娘である。1622 年(元和 8 年)イエズス会年報『周防の国のあるところに、豊後のフランシスコ(大友宗麟)王の孫に当たる夫人が住んでいる。彼女はマルガリタと言い、その信仰は彼女の祖父に決して劣らない』と書かれている。

蒲生路蓮そ、野村流いす、飯田こる弥りよとは、阿川毛利家臣のキリシタン達である。

長門国、萩のキリシタン代表者の名簿 8名 1047～1048 頁

木村左太夫満所、三輪七良右衛門如庵、岩倉久左衛門登明、福岡隼人了悟、楨村九左衛門、財間弥七判宇路、木村五右衛門伴ふ路、児玉与左衛門利庵。

* 『近世初期日本関係南蛮史料の研究』 松田毅一 風間書房 1967

第六章 元和三年、イエズス会士コーロス徴収文書 1022～1145 頁

【伊東マンショ神父が長門・周防に伝道した時に訪ねた毛利家のキリシタンたち】 毛利(大友)マセンシア(1570～1648年4月28日)

豊後の大友宗麟の7番目の娘で、孝子、桂姫、長千代姫、と呼ばれていた。1585年、15歳の時に受洗、洗礼名はドナ・マセンシア。以後、キリシタンとして確固たる信仰を持って生涯を歩み通した。1600年、長門に移り住んでからは、地名から通称・引地の君と呼ばれた。

1587年、小早川秀包(ひでかね)と結婚。熱心なキリシタンであり、夫小早川秀包の信仰に大きな影響を与えた。秀包との間に嫡男・元鎮、次男元貞、娘マルガリータ(毛利元景の妻)他、女子数名を産んでいる。

生涯概略

1570年(永禄13年・元龜元年) 大友義鎮(宗麟)の7番目の娘として誕生。名前は孝子。母は元々服部右京亮の妻であったが、宗麟が横恋慕をして服部を殺して妻を奪い、産ませた娘。1580年、ヴァリニャーノ神父が豊後に大友宗麟を訪ねて来た際に、乳母カタリナがキリシタンになり、その影響を受けて15歳の時1585年に受洗した。1587年、大友宗麟の人質として豊臣秀吉のもとにあったマセンシア(17歳)は下関に来ていた。敵対関係にあった毛利と大友を和解させたかった秀吉は、毛利の小早川隆景の息子・秀包(20歳)と大友宗麟の娘マセンシア(17歳)を結婚させた。

毛利秀包(ひでかね・1567～1601年)(マセンシアの夫)

毛利元就の9番目の息子として1567年に生まれた。毛利家嫡子の隆元は秀包が生まれる前に死去している。1579年、秀包は13歳で毛利元就の3男・小早川隆景(実兄)の養子となり、3年後の1583年、16歳の時に小早川家の人質として大阪城の羽柴秀吉の下に送られた時、諱『秀』の字を賜り『秀包』と改名した。1584年、18歳の時、小牧・長久手の戦いに秀吉配下として参戦した。1585年、河内で1万石、続いて四国征伐の際に、自ら長曾我部元親の家臣花房親兵衛を討ち取り、金子元春の守る伊予金子城を単独で攻略した戦功により伊予宇和郡大洲城・3万5千石を与えられた。1586年から始まった九州征伐では、養父(実兄)・小早川隆景に従って豊前香春獄城を攻略し、九州平定後は、隆景が筑前・筑後を領すると、筑後3郡7万5千石を拝領した。1587年には筑後の主要拠点として久留米城を構築し居城とした。

1587年3月、黒田官兵衛孝高(41歳)の熱心なキリスト教への勧誘もあって、豊前中津において、ペドロ・ゴメス神父から小早川秀包(20歳)は洗礼(洗礼名シメオン・フィンデナオ)

を受けた。毛利家家臣・熊谷元直（メルキオール）大友宗麟の嫡子・義統（よしむね・ドン・コンスタンチーノ）、黒田家嫡子・黒田長政（ドン・ダミアン）、黒田惣右衛門直之（ミゲル）黒田修理亮利則が同じ時に受洗した。秀包は洗礼を受けた時あまり教理を深く学ぶ機会が無いまま受洗した。

同年 7 月 24 日、博多箱崎に於いて九州征伐を終えた豊臣秀吉は、突然キリシタン（伴天連）追放令を発布した。高山右近（26 歳）はこの時、信仰を守るために一切躊躇せずに明石 6 万石を棄てた。

1588 年、ペドロ・ラモン神父は、久留米城に居るマセンシアの告解を聴くために医者に変装して久留米城に入った。同じ年にフロイス神父も笹山城を訪れている。1589 年の春、フロイス神父は再びマセンシアの告解を聴くためと、秀包に教理を詳しく説明するために久留米に戻っている。この時の教理の説明でキリストの教えを十分に理解して、生涯キリシタンとして生きていく心構えができた。6 月にはフロイスは秀包の嫡子・元信（元鎮・もとしげ）に洗礼を授けるためにもう 1 度久留米城を訪れている。元信の受洗の時、秀包の家臣 24 人が受洗した。

母マセンシアは父・大友宗麟の洗礼名であるドン・フランシスコと同じ洗礼名を息子・元信に与えた。秀包は洗礼を記念して宴を設けて家臣たちと共に祝い、マセンシアは父・宗麟の死の 2 年忌にあたって貧しい人々に食事を与えている。

マセンシアと秀包は、久留米城に豊後から大友宗麟の家臣の*白杵甚右衛門の娘・大友宗麟の外孫を養女として迎え、娘同様にキリシタンとして大事に育てている。白杵甚右衛門夫妻が相次いで亡くなったために、その娘をマセンシアが引き取り養育した。この娘はマセンシアと共に長門に行き、後日、**益田景祥（かげよし・1577~1630 年 7 月 13 日）**の後妻として嫁いでいる。

1590 年、天正遣欧少年使節を従えて 8 年半ぶりに帰国したヴァリニャーノ神父が、インド総督の使節として、豊臣秀吉に謁見するために京都聚楽第に行く準備をしていた時、マセンシアの乳母カタリナは長崎まで行って、上京の時に久留米によって秀包とマセンシアの信仰を勇氣付けて欲しいと切に願った。その願いに応じてヴァリニャーノ神父は佐嘉から久留米に行き、秀包とマセンシアを励ました。他のイエズス会イルマンも時々秘かに久留米を訪れて宣教している。1591 年には 1 人のイルマンが久留米を訪れて 100 名に洗礼を授けている。

文禄・慶長の役、1592 年（天正 20）1500 名の兵卒を率いて朝鮮に出兵。全羅道攻略の際、大鼓城の攻城で戦功を挙げた。碧蹄館の戦いでは、兄・小早川隆景、義兄弟・立花宗茂と共に明軍を撃破している。その戦功により筑後久留米のまま 5 万 5 千石を加増され 13 万石となり、筑後守に叙任された。

1597 年（慶長 2）慶長の役にも参戦が命じられ、竹島城、星洲谷城で防戦して、味方の危機を救っている。1593 年（慶長 3）豊臣秀吉の死（8 月 18 日）により、慶長の役が終わり日本軍は徐々に撤退を開始した。

1593 年末頃、秀包が久留米に帰ってから以前のような教会生活に戻ってきた。久留米城下に 1

つの教会が建てられ1人の神父が常駐してキリシタンの支えとなった。1599年には笹山城近くにもう1つの教会が建てられそこに他の神父が住んで宣教をした。その年、周辺の信者数は4千を超えていた。この時、主家である毛利輝元は教会の発展を止めようとしたが、秀包は彼に応じなかった。1600年、関ヶ原の戦いの前には久留米の信者は7千にまで増えていた。

関ヶ原の戦い、1600年9月、関ヶ原の戦いで毛利家は西軍に加わり、8月に大阪城玉造口を準備した。9月3日、京極高次の大津城を兄の末次元康や立花宗茂等と共に攻め、6人の武将が戦死、3人の重臣が重傷を負う損害を出しながらも落城させた。しかし、小早川秀秋の東軍への内応や吉川広家・毛利秀元の日和見行為により西軍が敗れたために、大津城を撤退して大阪城に帰還した。毛利秀包は敗れた西軍の将として領地久留米を没収され、毛利家お預けとなり、11月末、赤間関（下関）に帰還した。

久留米城の戦い、1600年10月14日、秀包の国元久留米城でも、東軍の黒田官兵衛如水・鍋島直茂、加藤清正の軍、3万7千が久留米城に攻撃を開始した。久留米城内には宿老・桂民部大輔広繁、白井景俊以下侍200名、足軽・中間500人の守備隊がいた。

秀包は出陣の際『敵がもしシメオン如水軍であったら、黒田の指示に従うように』と桂広繁に言い含めていた。城内は討死に覚悟で数日の猛攻に耐えたが、黒田如水は使者に弟でキリシタンである黒田ミゲル惣右衛門直之を送り開城を勧めた。重臣・桂広繁は黒田軍の開城勧告に従い久留米城を明け渡した。秀包の妻・マセンシアと嫡男・元鎮は黒田家の人質に、宿老桂広繁の4男・黒寿丸（鎮澄）鍋島家の人質になった。久留米城の危機的状況から、マセンシアと元鎮を救い出したのは、同じキリシタンであり、黒田官兵衛の異母弟・黒田ミゲル惣右衛門直之だった。

毛利秀包は関ヶ原の戦いで敗れて改易された後、剃髪して『入道道叱』と名乗った。久留米城除封のため11月末に赤間関（下関）に帰還した。その後、毛利輝元に召し出されて7千石を与えられ、長州藩内で長門阿川・滝部・殿居を領した。黒田家で身柄を保護されていたマセンシアと嫡子・元鎮は、無事に阿川・滝部に居る夫秀包のもとに送られた。

1601年（慶長6）破傷風の悪化により、加療養生していた下関南部・宮本二郎大夫宅にて死去した。享年35歳。遺骸は、滝部桂広繁領地（現西楽寺裏山）に埋葬された。秀包の死後、一族は小早川姓より毛利姓に復した。

秀包の死後、マセンシアは、夫、秀包の領地を受け継いだ嫡男・元鎮（もとしげ・フランシスコ）と共に、阿川と殿居で子供たちを育てながら生活した。毛利家当主・毛利輝元はマセンシアに信仰をやめるように再三命令したが、彼女はその命令に従うことなく、逆に時には宣教師が訪れることができるようにと許可を願った。輝元はついにマセンシアの信仰を黙認した。

マセンシアはすでに洗礼を受けている5人の子供たちの信仰心を育て続けた。嫡男フランシスコ元鎮は殿居に5千石の知行を受けたが、1625年（寛永2）に吉敷に領地替えとなり、1万1

千石余に加増された。この年、領地替えの後引退して嫡子・元包（もとかね・19歳）に譲っている。元包は家宅を吉敷に移し、吉敷毛利を興している。元鎮は殿居に移りマセンシア『引地の君』と阿川の君（マルガリータ）は阿川に残った。母マセンシアの住む阿川毛利館と娘阿川の君・マルガリータの屋敷は徒歩で通える距離にあった。マセンシアは『引地の君』と呼ばれた。引地とは（引く）免税地の意味である。

マセンシアと教会の関係は、小倉教会から、1609年に、イルマン・アンデレ斎藤、1610年に伊東マンショ神父とイルマン・アンデレ斎藤が訪ねている。広島教会から1615年には石田神父が訪ねている。

阿川毛利家二代目・毛利（元繁沢）志摩守元景もキリシタンであり、元景の妻・マルガリータは毛利秀包（1567～1601年）と大友宗麟の娘マセンシア（1570～1648年）の間に生まれた娘である。1615年と1622年（元和8年）イエズス会年報『周防の国のあるところに、豊後のフランシスコ（大友宗麟）王の孫に当たる夫人が住んでいる。彼女はマルガリータと言ひ、その信仰は彼女の祖父に決して劣らない』と書かれている。

数人の子供たちが不幸にも母マセンシアに先立って亡くなったが、マセンシアは一人信仰生活を守り続けた。マセンシアとは最晩年、殿居で息子・元鎮と暮らして老後を見てもらい、殿居の館で死去した。

1648年（正保5年・慶安元年）4月25日、78歳で死去。毛利家の菩提寺である神上寺に葬られたが、キリシタンであったが故に、毛利家の墓所には葬られずに、神上寺裏山の旧墓地、円墳のような小山の頂にマセンシアは葬られた。『高雲照朝大禅定尼』

毛利元鎮（もとしげ・1591～1672年）

毛利元鎮は安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将で生まれながらのキリシタン。ドン・フランシスコの洗礼名は、祖父である大友宗麟の洗礼名から採られた。毛利氏の一門家老吉敷毛利家の祖。小早川秀包と大友宗麟の娘マセンシアの嫡子。

1589年の春、フロイス神父は再びマセンシアの告解を聴くためと、秀包に教理を詳しく説明するために久留米に戻っている。秀包はこの時の教理の説明でキリストの教えを十分に理解して、生涯キリシタンとして生きていく心構えができた。6月にはフロイスは秀包の嫡子・元信（元鎮・もとしげ）に洗礼を授けるためにもう1度久留米城を訪れている。元信の受洗の時、秀包の家臣24人が受洗した。

母マセンシアは父・大友宗麟の洗礼名であるドン・フランシスコと同じ洗礼名を息子・元信に与えた。秀包は洗礼を記念して宴を設けて家臣たちと共に祝い、マセンシアは父・宗麟の死の2年忌にあたって貧しい人々に食事を与えている。

父・小早川秀包が関ヶ原の戦いで敗れて改易された後、毛利輝元に召し出されて、長州藩内の長門阿川・滝部・殿居に7千石を与えられて毛利輝元に仕えた。父・秀包が1601年に35歳で

死去した後、父の領地を継いだ。

1600年（慶長5）13歳で久留米城から長門川棚に引き上げた元鎮は、1601年（慶長6）滝部久森（現豊北高校）の館に住んだ後、豊北阿川に館を移した。

1625年（寛永2）元鎮（37歳）吉敷に領地替えになり、1万1千石余に加増された。以後一族は吉敷毛利と称し、一門家老吉敷毛利となった。後に2万石への加増が内示されたが辞退している。同年、嫡男元包（もとしげ・19歳）に家督を譲って隠居した。

母マセンシアを殿居の館に引き取り、マセンシアの最晩年を共に暮らしている。マセンシアは殿居の館で息子元鎮に看取られて死去している。

殿居の館は（現・山口県下関市豊田町）1600年、久留米城から共に引き上げてきた家臣柏村重内に殿居に田畑を与えるとともに、自分の妾腹の子を養子とさせ村松と名乗らせ遺言を守らせた。松村家並びに見龍寺前の地に、剃髪し『元信入道柳庵』と称したフランシスコ元鎮が晩年を母マセンシアと共に暮らした隠居跡がある。

1672年（寛文12）2月26日、82歳。豊田（現・山口県下関市豊田町）で死去した。

毛利元景（もとかげ・1575～1631年9月5日）

長州藩一門家老である阿川毛利家の2代。父は毛利元氏。正室は小早川秀包の娘・マルガリータ。嫡男・就方、次男・繁沢元貞、3男・繁沢就眞、娘・三浦元忠正室の4人がいる。

1575年（天正3）仁保元棟（後の毛利元氏）の嫡男として生まれる。1587年、父・元氏が繁沢氏を相続したため、繁沢元景と名乗る。1613年、毛利氏を名乗ることが許される。

1614年（慶長19）大阪冬の陣に際に、徳川家康から毛利家に摂津江口に堤を築くように命ぜられ、元景がその普請の監督にあたった。

【1617年・元和3年、コーロス徴収文書による記録】

コーロス徴収文書とは1617年（元和3）9月7日周防国・岩国。9月3日周防国・玖珂（くが）、8月18日長門国・萩。3つの町のキリシタンの代表者達がイエズス会日本管区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、岩国5名、玖珂（くが）4名、萩8名の指導者の名前が記録されている。

周防国、玖珂（くが）のキリシタン代表者の名簿 4名 1046～1047頁

繁沢志摩守阿くす地いの、蒲生路蓮そ、野村流いす、飯田こる弥りよ。

筆頭に署名している「繁沢志摩守阿くす地いの」とは、阿川毛利家二代目・毛利（元繁沢）志摩守元景であり、元景の妻・マルガリータは毛利秀包（1567～1601年）と大友宗麟の娘マセンシアの間に生まれた娘である。1622年（元和8年）イエズス会年報『周防の国のあるところに、豊後のフランシスコ（大友宗麟）王の孫に当たる夫人が住んでいる。彼女はマルガリータと言い、その信仰は彼女の祖父に決して劣らない』と書かれている。

蒲生路蓮そ、野村流いす、飯田こる弥りよとは、阿川毛利家臣のキリシタン達である。

1625年（寛永2）父・毛利元氏の隠居により家督を相続した。同年、玖珂郡椋杜から豊浦郡阿川に知行替えとなり、以後、代々阿川領主・長州藩一門家老を務めた。

父毛利元氏、母仁保隆在娘、正室マルガリータと子供たち。家臣共々移り、阿川毛利館に住んだ。元景の時、1629年（寛永6）6千石。家臣52名。

1631年（寛永8）8月9日、死去。享年57歳。墓所は山口県長門市深川の大寧寺。

家督は嫡男・就方が相続した。嫡男就方の時6210石。家臣64名。

益田景祥（かげよし・1577～1630年7月13日）

石見の国の国人、益田氏の武士。毛利氏の重臣で問田益田氏の初代。

父は益田元祥、母は吉川元春（毛利元就の次男）の娘。正室は児玉元良の娘、**再室は*白杵甚右衛門の娘。（小早川秀包・マセンシアの養女）**

兄弟に広兼、吉川家澄、就之、就景。通称は七内、修理亮、河内守。

1577年（天正5）毛利家重臣益田元祥の2男として生まれた。生母は吉川元春（毛利元就の次男）の娘で、毛利元就の外孫にあたる。初め筑前の国・宗像氏の養子になるが、兄の益田広兼が急死したために、父元祥に請われて実家に戻り家督を継ぐ。

武人としての器量があったために小早川隆景（1533～1597年7月26日）に仕えて、当時若年ながら朝鮮出兵で活躍して、隆景から軍功を称えられ偏諱を貰い『景祥』と名乗る。

朝鮮の役では、毛利家の経済発展のために『高麗焼』の陶工たちを連れて帰り、地元に住まわせて萩焼き等の基礎を作った。焼き物の取引により毛利家の経済を立て直した功績は大きく、毛利の重臣としての信頼も厚かった。

隆景が武家清華家に列した時に、諸大夫成している。小早川隆景の死後（1597年）、豊臣秀吉から筑前名島周辺1万石で隆景の養子である小早川秀秋に仕える様に命じられたが、苦慮の末、毛利輝元の直臣となった。1600年、関ヶ原の戦の後、防長転封の時に、父元祥と共に奔走して、萩城の築城や萩藩の経済の立て直しなどに大きな力を発揮して、毛利家の支配体制確立に多大な功績を残した。

山口の郊外、問田は益田景祥の給領地の周防国吉敷郡問田に移り住んだ。問田には『角常・かくのじょう』という毛利藩の軍馬の交配牧場があった。その管理も益田景祥に任されていた。益田景祥は自らも問田に屋敷を構えて住み、家臣たちも問田に住まわせていたので、問田は武家屋敷の様相を持っていた。

益田景祥は元主君の小早川隆景（1533～1597年）の**正室・問田大方**（小早川正平の娘）を安岐の三原城から、主君小早川隆景の死後に招いて責任を持って面倒を見ていた。隆景夫人・問田大方は、問田で1597年からその死の1619年6月21日までの22年間を問田で過ごしたので『問田の大方』と呼ばれるようになった。

益田景祥は明らかにキリシタン庇護者だった。後妻・再室は*白杵甚右衛門の娘。(小早川秀包・マセンシアの養女・大友宗麟の外孫) 1588年頃、マセンシアと秀包は、久留米城に豊後から大友宗麟の家臣の*白杵甚右衛門の娘・大友宗麟の外孫を養女として迎え、娘同様にキリシタンとして大事に育てている。白杵甚右衛門夫妻が相次いで亡くなったために、その娘をマセンシアが引き取り養育した。この娘はマセンシアと共に長門に行き、後日、キリシタンに対して深い理解のある益田景祥の後妻として嫁継がせている。益田景祥と景祥夫人と夫婦生活はキリシタン家庭として豊かで心安らく家庭であったことが伺える。問田大方は益田景祥夫人を通して、益田景祥夫人の母マセンシアとも常に連絡が取れて、キリシタンとして自分の信仰を守るのにこれ以上の場所はなかったから非常に居心地は良かったと思われる。『問田大方』とマセンシアの関係は『問田大方』の夫・小早川隆景の弟・秀包の嫁が『マセンシア』であるという義理の姉妹関係また嫁姑関係であり、ともにキリシタンであるので非常に仲が良く共にキリシタンとして信仰についての話もできる信頼のおける義理の姉妹であった。

1610年、伊東マンショ神父(40歳)が長門周防に伝道に出かけた際の記録に

『神父【伊東マンショ神父】はまた、よく信仰を続けてきた山口の古い信者をも訪れたが、彼らからもたいへん歓迎され、もてなしを受けた。その町の奉行・益田景祥(かげよし・1577～1630年7月13日)は異教徒でありながらキリシタン達に反感を示さず、かえって好意を寄せているので、神父は何の妨げもなく、そこでまったく自由に聖務を遂行することができた。そして神父は彼を訪問して、彼自身もまた神父を訪れて神父に対して数々の世辞を言い、最も丁寧な言葉と友情の印を表していた。そして神父の出発にあたっては、彼は街外れまで見送り、別れのときに、神父がキリシタンを訪問するため山口へ来る場合、いつでもまったく自由に、また公にそれをしてよい、また何の心配もなく何日でもそこに滞在してもかまわない、そしてもしも毛利がそのために怒るならば、自分がその責任をとると言った。このようなわけで、これからはいつも自由に、かの地のキリシタンを訪問することができるから、彼らも、神父自身も非常に勇気づけられた。』

(ロドリゲス・ジラン神父、1612年3月10日付け・長崎)

ロドリゲス・ジラン神父の記録から読み取れることは「山口では、キリシタンに対して理解ある徳の高い奉行が宣教の許可を与えてくれ、伊東マンショ神父は自由に信徒達を訪問して慰め、告解を聴き秘蹟を授けている。もしも毛利がそのために怒るならば、自分がその責任をとると言った。」当時の毛利家当主は毛利輝元であり、輝元に直にキリシタンに対しての擁護意見を述べる地位と役職についている人は、山口の町の奉行という地域職の侍よりも最と地位の高い毛利家家臣であり、山口在住の益田景祥(33歳)の外に考えられない。

伊東マンショ神父の、萩での命を懸けて行った秘密裏の宣教とは違い、山口での働きは毛利家家臣・益田景祥により宣教が支えられ伊東マンショ神父の心に大きな喜びと慰めを与えた。ここでも将来の迫害に備えて信徒組織(コンフラリア)を組織している。

益田氏宗家は兄広兼の子・元堯に自分の娘を嫁がせて継がせ、景祥本人は分家して問田益田氏として独立している。始め周防右田で2500石、長門江崎を経て後、1625年（寛永2）周防国吉敷問田深野等で4096石の知行を貰い、藩の寄組に列した。

1630年（寛永7）7月13日、54歳、山口にて死去。笠松山麓に葬られた。家督は嫡男の就固が継いだ。

問田大方（といだのおおかた・生年不明～1619年6月21日）

夫の小早川隆景（1533～1597年7月26日）は、1533年、毛利元就の3男として生まれた。兄弟に同母の毛利隆元、次男吉川元春。

（毛利家台頭の時代）

問田大方（隆景は正室）は小早川氏の本家・沼田小早川家の当主・小早川正平の娘として生まれた。父・正平が21歳で討ち死にしたため、兄の繁平が沼田の家督を継いだ。しかし繁平は幼少の上病弱だったため、大内義隆や毛利元就に、尼子氏の侵攻が始まった際に防ぐことができないと懸念され1550年（天文19）尼子氏と内通した疑いで拘禁され、強制的に隠居・出家させられた。1551年（天文20）竹原小早川家を継いでいた元就の3男・小早川隆景に本家沼田小早川家の家督を継がせるために、隆景と結婚した。

竹原小早川家を継承して、後に結婚により沼田小早川家も継承して両家を統合。兄吉川元春と共に毛利両川として戦国大名毛利家の発展に尽くした。毛利水軍の指揮官として活躍している。毛利家が中国地方の雄としての確立時期より、兄吉川元春と共に、毛利両川体制で戦い、大内義隆、陶治賢、尼子氏を滅ぼして中国地方を領した。

問田大方がいつ頃洗礼を受けキリシタンになったかについてはイエズス会にそれを裏付ける直接的な史料がないために明確な時期が特定できない。

しかし、夫小早川隆景の末弟であり養子でもある小早川秀包（20歳）が1587年3月、黒田官兵衛孝高（41歳）の熱心なキリスト教への勧誘もあって、豊前中津において、ペドロ・ゴメス神父から小早川秀包は洗礼（洗礼名ドン・シメオン・フィンデナオ）を受けた。秀包は洗礼を受けた時あまり教理を深く学ぶ機会が無いまま受洗した。

1586年（天正14）豊臣秀吉の九州征伐が始まった時、養父・隆景に従って豊前香春嶽城を攻略して戦功を挙げ、戦後に隆景が筑前・筑後を領した時に、筑後3郡7万5千石を与えられ、1587年には久留米城を築き、居城とした。

1587年、大友宗麟の人質として豊臣秀吉のもとにあったマセンシア（17歳）は下関に来ていた。敵対関係にあった毛利と大友を和解させたかった秀吉は、毛利の小早川隆景の息子・秀包（20歳）と大友宗麟の娘マセンシア（17歳）を結婚させた。秀包とマセンシア、ともにキリシタンである2人の結婚はイエズス会にとっても喜ばしい事であった。マセンシアの信仰は確かなもので夫秀包と生まれてきた子供たちに、確固たるキリストの信仰を伝え守らせている。

1588年ペドロ・ラモン神父は、久留米城に居るマセンシアの告解を聴くために医者に変装して久留米城に入った。同じ年にフロイス神父も笹山城を訪れている。1589年の春、フロイス神父は再びマセンシアの告解を聴くためと、秀包に教理を詳しく説明するために久留米に戻っている。この時の教理の説明でキリストの教えを十分に理解して、生涯キリシタンとして生きていく心構えができた。6月にはフロイスは秀包の嫡子・元信（元鎮・もとしげ）に洗礼を授けるためにもう1度久留米城を訪れている。元信の受洗の時、秀包の家臣24人が受洗した。

母マセンシアは父・大友宗麟の洗礼名であるドン・フランシスコと同じ洗礼名を息子・元信に与えた。秀包は洗礼を記念して宴を設けて家臣たちと共に祝い、マセンシアは父・宗麟の死の2年忌にあたって貧しい人々に食事を与えている。

マセンシアと秀包は、久留米城に豊後から大友宗麟の家臣の***白杵甚右衛門の娘・大友宗麟の外孫**を養女として迎え、娘同様にキリシタンとして大事に育てている。白杵甚右衛門夫妻が相次いで亡くなったために、その娘をマセンシアが引き取り養育した。この娘はマセンシアと共に長門に行き、後日、**益田景祥（かげよし・1577～1630年7月13日）**の後妻として嫁いでいる。

この様に、問田大方の夫隆景の末弟で養子の小早川秀包が1587年3月に洗礼（洗礼名ドン・シメオン・フィンデナオ）を受けていること。同年に秀包（20歳）と大友宗麟の娘マセンシア（17歳）が結婚したこと。久留米城での秀包とマセンシアとの暖かいキリシタン家庭生活を見ていること。1890年には孫である秀包の嫡子・元信に洗礼を授け、母マセンシアは父・大友宗麟の洗礼名であるドン・フランシスコと同じ洗礼名を息子・元信に与えていること等を考えると、問田大方は祝い事があるたびにマセンシアと秀包のいる久留米城を訪れているのではないだろうか。そのような機会にキリシタンの生き方を見て感銘を受けたであろうし、嫁であるマセンシアの信仰の素晴らしさを共に暮らしてみても理解したと思われる。またキリスト教教理をマセンシアから、また乳母のカタリナから聴き学ぶ機会が持たれたことは自然であった。

問田大方はマセンシアと秀包が久留米城に豊後から大友宗麟の家臣の***白杵甚右衛門の娘・大友宗麟の外孫**を養女として迎え、娘同様にキリシタンとして大事に育てている。白杵甚右衛門夫妻が相次いで亡くなったために、その娘をマセンシアが引き取り養育していることを知っていたし、その養女にも久留米城で会って知っていて、マセンシアと同じように問田大方はその養女を孫として可愛がっていた。この養女が後に益田景祥の後妻・**再室は*白杵甚右衛門の娘。（小早川秀包・マセンシアの養女・大友宗麟の外孫）**になり山口に住んでいた。いふなれば、問田大方は、夫隆景の死後、山口に行きマセンシアの養女、つまり孫と共に暮らしていたことになる。問田大方の屋敷跡は現・山口市大内御堀1705、山口合同ガス山口支店になっている。

益田景祥は元主君の**小早川隆景（1533～1597年）の正室・問田大方（小早川正平の娘）**を安岐の三原城から、主君小早川隆景の死後1597年に招いて責任を持って面倒を見ていた。隆景夫人・問田大方は、問田で1597年からその死の1619年6月21日までの22年間を問田

で過ごしたので『問田の大方』と呼ばれるようになった。

益田景祥は明らかにキリシタン庇護者だった。後妻・再室は*白杵甚右衛門の娘。(小早川秀包・マセンシアの養女・大友宗麟の外孫)で、1588年頃、マセンシアと秀包は、久留米城に豊後から大友宗麟の家臣の*白杵甚右衛門の娘・大友宗麟の外孫を養女として迎え、娘同様にキリシタンとして大事に育てている。白杵甚右衛門夫妻が相次いで亡くなったために、その娘をマセンシアが引き取り養育した。この娘はマセンシアと共に長門に行き、後日、キリシタンに対して深い理解のある益田景祥の後妻として嫁継がせている。益田景祥と景祥夫人と夫婦生活はキリシタン家庭として豊かで心安らぐ家庭であったことが伺える。問田大方は義理孫の益田景祥夫人を通して、益田景祥夫人の母(問田大方の嫁)マセンシアとも常に連絡が取れて、キリシタンとして自分の信仰を守るのにこれ以上の場所はなかったから非常に居心地は良かったと思われる。『問田大方』とマセンシアの関係は『問田大方』の夫・小早川隆景の弟・秀包の嫁が『マセンシア』であるという義理の姉妹関係・嫁姑関係にあり、ともにキリシタンであるので非常に仲が良く共にキリシタンとして信仰についての話もできる信頼のおける義理の姉妹・嫁姑であった。『問田大方』も『マセンシア』も生涯、命を懸けて信仰を守り通した。

1619年(元和5)6月21日死去。墓は『泰雲寺』(山口市下小鯖鳴滝)にある。

法名『慈光院月溪智』

小早川隆景(1533~1597年7月26日)

小早川隆景は、1533年、毛利元就の3男として生まれた。兄弟に同母の嫡男・毛利隆元、次男・吉川元春。

(毛利家台頭の時代)

問田大方(隆景は正室)は小早川氏の本家・沼田小早川家の当主・小早川正平の娘として生まれた。父・正平が21歳で討ち死にしたため、兄の繁平が沼田の家督を継いだ。しかし繁平は幼少の上病弱だったため、大内義隆や毛利元就に、尼子氏の侵攻が始まった際に防ぐことができないと懸念され1550年(天文19)尼子氏と内通した疑いで拘禁され、強制的に隠居・出家させられた。1551年(天文20)竹原小早川家を継いでいた元就の3男・小早川隆景に本家沼田小早川家の家督を継がせるために、隆景と結婚した。

竹原小早川家を継承して、後に結婚により沼田小早川家も継承して両家を統合。兄吉川元春と共に毛利両川として戦国大名毛利家の発展に尽くした。毛利水軍の指揮官として活躍している。毛利家が中国地方の雄としての確立時期より、兄吉川元春と共に、毛利両川体制で戦い、大内義隆、陶治賢、尼子氏を滅ぼして中国地方を領した。

（信長・秀吉との戦いの時代）

1576年、鞆の浦の落ち延びてきた室町幕府第15代将軍・足利義昭の誘いにより、織田氏と断交して交戦状態に入った。吉川元春が山陰方面、隆景が山陽方面と水軍を担当して、信長と戦っていた大阪の石山本願寺と救援した第1次木津川口の戦い（1576年）では、小早川水軍と村上水軍の連合軍が織田方の九鬼水軍を破った。2年後の1578年（天正6）第2次木津川口の戦いでは、鉄甲船で防御した九鬼水軍に敗れて制海権を失い、1580年には石山本願寺も信長と講和して大阪を退去したために、毛利も戦いから退いた。

織田方の中国方面司令官である羽柴秀吉の攻略により、1579年、備前国の宇喜多直家が織田方に付き、1580年、播磨三木城が2年の籠城に末に陥落、別所長治が自害。1581年、因場鳥取城が多数の餓死者を出した籠城戦の末に陥落、城主・吉川経家が自害している。

1582年、備中高松城が水攻め包囲で陥落、清水宗治が自害している。

織田信長が6月に本能寺の変で死去した後、情勢の変化を見極めるために毛利軍はしばらく戦いを控えている。その間1582年、隆景は居城を新高山から瀬戸内海に面した安芸三原城に移している。

（豊臣政権下）

1583年、賤ヶ岳の戦いでは毛利家は中立を保ち、この戦いで羽柴秀吉が柴田勝家を破ると、世の趨勢が決したと見て、秀吉に従属した。この時、隆景は人質として養子の小早川元総（末弟、後の秀包）を秀吉に差し出している。

その後は秀吉に全面的に協力して、1585年、四国征伐では伊予国金子元宅と討ち取り功績をあげた。秀吉は大名統制策として隆景に伊予一国30万7千石を与え独立大名として扱ったが、隆景は、毛利家に伊予を与えられ、毛利家の一武将として伊予を受領する形で体制を保った。湯築城に入城した隆景は大津城に秀包を置いて伊予の国の統治を開始して、河野通直を道後に隠居させて旧河野家家臣や西園寺公広とその家臣を配下として、伊予国の治安と不満を制している。2年間の伊予国支配も、隆景の本拠地は安岐の三原城のままであった。

伊予に於いて隆景は初めて副管区長コエリヨ神父とフロイス神父に出会い3~4日の短い時間ではあったがキリスト教に接した。隆景の宣教師に対する尊敬と敬愛の姿勢として、賓客をもてなすように接している。四国征伐で共に軍師として協力した黒田官兵衛孝高からキリシタンの素晴らしさを聴いていた隆景は、宣教師に禅宗とキリスト教の違いを聴き、隆景自身の考えを整理して回答している。禅宗とキリスト教を比較して、隆景自身はキリスト教に対して誤解していたことを素直に認めて、もっとキリスト教についての教えを聴きたいと述べている。

隆景の伊予支配は素晴らしいもので、ルイス・フロイス神父は『隆景は深い思慮を持って平穩裏に国を治め、日本では珍しいことだが、伊予の国には騒動も叛乱もない、』と称賛して、隆景が政治家としても卓越した指導者として評価している。（フロイス著『日本史』第11巻、35頁）

1586年、九州征伐の折り下関に於いて、キリシタン大名であり秀吉の参謀・黒田官兵衛孝高の紹介で隆景は再びコエリヨ神父と出会っている。この時、副管区長コエリヨの要望で、下関に新しい司祭館を建てることになった。黒田官兵衛孝高は『わずか2年前に高山ジスト右近殿とその父ダリオ、および他の殿たちの説得によって大阪でキリシタンになった。』（第11巻、46頁）『この清廉な人物（黒田官兵衛孝高）は優秀な主将であり、その業において傑出していた。』黒田官兵衛孝高は秀吉の任命を受けた九州征伐の総指揮官として四国にいた毛利軍を九州に移動させたのち、隆景に相談して、毛利の領地である下関に司祭館を建てることを、キリシタン嫌いの安芸吉田にいた毛利家当主・毛利輝元に承諾させた。この交渉に隆景が毛利の責任者として関わっていたことが、隆景のキリシタン容認の姿勢が明確に現われている。

秀吉の2人の軍師、黒田官兵衛孝高と叔父であり後見人である小早川隆景の要求には、毛利藩藩主の輝元も逆らえなかった。『なぜなら、山口にいる国主（毛利輝元）の主だった役人たちは、官兵衛の前では自分たちの国主の面前に罷り出る時以上に戦慄していたからである。その彼（黒田官兵衛）が司祭に対して深い尊敬と恭順を示したので、異教徒たちは驚嘆した。それもこの時まで、哀れなキリシタンなどほとんど誰ひとり顧みる者もなく、見捨てられた土地柄（長門周防）だったからである。』『コエリヨ師が山口から下関に戻った後数日を経て、国主輝元の叔父小早川隆景殿と、その首席家老が下関に到着した。司祭が小早川隆景殿を訪問したい旨を表明すると黒田官兵衛孝高殿も自ら進んで司祭に同行した。小早川隆景殿は司祭を異常なばかりに歓待し、副管区長に伴っていた我ら一同を食事に招いた。その際、彼は、あたかも自分が日頃深く尊敬している師匠である仏僧某に体面するかのように、司祭に対し、日本流のあらゆる儀礼のうちに深い礼節を保つことを忘れなかった。』

『それとは別の折りに、小早川隆景殿は官兵衛孝高殿の勧めによって、副管区長を自宅に招待した。彼は食事が終わってから約1時間にわたって、天地の創造主であるデウスと人類の贖い主は誰一で、御一方しかありえないことや、デウスと日本の神仏の相違を扱った教理の最初の説教を聞いた。彼は進んで聴聞を望み、それに大いなる喜悦を示した。官兵衛殿が聴聞するように勧誘して廻ったので、大勢の貴人や身分の高い小早川殿の家来たちも部屋の外の縁から説教を聞いていた。官兵衛殿は小早川殿がキリシタン教えの話における幾つかの道理に満足の意を表すのを見て誇らしげであった。官兵衛殿は、説教が終わった後もなお、小早川殿に向かい、説教の内容を明瞭にするために、若干の補足を加えるように努めた。』

九州征伐が1587年7月に終り、7月24日、博多箱崎に於いて、秀吉は『伴天連追放令』を發布した。小早川隆景は恩賞として筑前・筑後・肥前1郡37万1300石を与えられた。しかし、九州征伐の時、次兄・吉川元春とその嫡男・元長が相次いで病死したために、隆景は1人で毛利輝元を補佐し、毛利家を守っていくことになった。小早川隆景は豊共政権下で大々名として取り立てられたが、伊予の国を預かった時と同じく、隆景自身は毛利家家臣として筑前は自分の領国とはせずに、豊臣家からの預かり物として管理した。

1592年(文禄元)文禄の役が始まると、6番隊主将として1万の兵を率いて出陣し全羅道攻撃を行うが抵抗を受け、本格的な攻略を行わないうちに、援軍として来た明国軍に対応するために京畿道へ配置転換され、1593年(文禄3)碧蹄館の戦いに於いて明軍本隊を立花宗茂と共に撃退した。1594年、明国との和平交渉成立のため帰国した。隆景は朝鮮出の戦いの最中に脳卒中で体調を壊している。

1595年、秀吉が発令した『御掟』5カ条と『御掟追加』9カ条に於いて、徳川家康、前田利家等と共に五大老のひとりに任ぜられた。その後、小早川秀秋に家督を譲って隠居し、家臣団と共に安芸の三原城に住んだ。隠居料として筑前に5万石という破格の隠居料を拝領した。このことでいかに秀吉が隆景の功績と私利私欲のない人物として高く評価していたかが解る。

同年12月、『26聖人の殉教事件』がおこった。11月12日に逮捕された24人の殉教者たちは、13日に京都に到着、15日、左耳の1部を切り取られ、荷車に乗せられて引き回された。伏見、大阪を経て、21日に堺を出発。12月2日に隆景の城下三原に入った。罪人は各地の代官所の牢屋に入れて監視するが、隆景は、秀吉に疑われることもかまわずに、26人のキリシタンを三原城に入れて丁重に遇している。罪もなくキリストを信じているという理由だけで磔にされる彼らに、遺言を書くための紙と墨を与えている。この時14歳のトマス小崎は母に宛てた手紙を書いて一緒に殉教した父ミゲル小崎に手渡した。父ミゲル小崎は、息子トマスの手紙を大事に袋に入れて懐にしまい殉教地・長崎の西坂の十字架の上まで運んだ。1596年2月5日、26人は磔刑の上でキリストに命を捧げた。磔刑にされた後、殉教者たちの形見を求める信者たちの中の1人のポルトガル人が、ミゲル小崎の着物の懐に袋に入ったその手紙と1枚の御絵と共を見付けた。御絵には心臓の上に十字架を担う幼きイエズスが描かれていた。その手紙は父ミゲルの血で染められていた。父ミゲルは息子トマスが三原城で書いた手紙に自分の血でもって署名した。長崎にいたルイス・フロイス神父のもとに届けられたその手紙を翻訳して『殉教記』に記録した。私たちの手元に届けられたのはフロイスの翻訳である。当時、長崎にいたリバデネイラ神父の著書にも手紙が載せられているが、その文章はフロイスが書いたものと一致している。この1通の手紙の中に隠された神の摂理が見える。隆景のキリシタンへの同情以上の深い慈悲の心を感じる。隆景は26人のキリシタンの長崎への歩みの中に、十字架へ歩むキリストの姿を重ねて見ていたのかもしれない。隆景が26人のキリシタンに施した慈悲の心は、キリストへの隆景自身の心からの供え物だった。

半年後の1597年7月26日(慶長2年6月12日)小早川隆景は三原城に於いて脳卒中で突然に死去した。享年65歳。遺骸は三原城下の法常寺で荼毘にふされた。墓所は広島県三原市の東慮山米山寺。戒名『隆景寺殿前黄門泰雲紹閑大居士』

正室の間田大方は隆景の葬儀を執り行った後、山口にいる隆景の家臣であった益田景祥(かげよし・1577~1630年7月13日)のもとに身を寄せ、22年後に山口の地で亡くなっている。

【伊東マンショ神父に報告された長門・周防の現状】

しかし、過去のイエズス会の情報により伊東マンショ神父が知りえた長門・周防での非常に困難な宣教の状態は、目を覆いたくなる戦慄する殺戮と迫害が毛利輝元により展開されていた。

メルキオール熊谷元直一族の殉教

イエズス会『1605 五年度日本年報』によると、1605 年（慶長 10 年）8 月 16 日、毛利家の重臣であり、長門教会の柱石メルキオール熊谷元直（50 歳）が、萩に於いて、一族 11 名とともに処刑され殉教している。

メルキオール熊谷豊前守元直は斬首。メルキオールの妻、次男・二郎兵衛、末子・フランシスコ猪之介、（熊谷元直の娘婿）天野元信、元信の子・与吉（11 歳）、お快（8 歳）

くま（2 歳）、幼児、（熊谷元直妻の弟）佐波善内（次郎右衛門）、三輪八郎兵衛元佑、中原善兵衛、一族 11 名は寺院に閉じ込められて焼き殺された。また、メルキオール熊谷元直

と天野元信の大勢の家来達、当時キリシタンの間に流布した噂によれば、殺害されたその数は約 100 人以上といわれていた。

『（メルキオール熊谷元直）はその時（斬首による処刑）のために少し準備をさせてほしい、といとも穏やかに請うた。部屋に入って、別の上等の着物に着替え、首に聖遺物入れをかけ、聖画像の前に跪坐し、そこで、祈祷中に斬首された。そして、首級は彼の着物に包まれて毛利殿のもとに運ばれた。彼はメルキオールの死に満足せず、自分と親戚関係にある者を除いて、彼の妻、子、孫をも殺すように命じ、全員をいっしょにして寺院で焼かせた。同じように、紛争の当事者の一方であったメルキオールの婿（天野元信）をも、メルキオールとその婿の大勢の家来たちをも殺させた。その数は、噂によれば百人を超えた。』

（ジョアン・ロドゥリーゲス・ジランの書簡）

* 参考文献

熊谷豊前守元直の殺害【殉教】の明細な記録については下記の文献を参照してください。

* 『熊谷豊前守元直』あるキリシタン武士の生涯と殉教 H・チースリク著

キリシタン文化研究シリーズ 17、キリシタン文化研究会

* 長防切支丹誌・改訂版 アウグスチノ岩崎太郎著 自家本

『訴訟事件に関係したこの他の者たちも—すべてキリシタンであるが—処刑された。佐波善内はその夜ちょうど熊谷の屋敷にいて殺された。三輪八郎兵衛元裕と中原善兵衛は、同じくそれぞれの自宅で襲撃され、殺害された。このうち中原だけは、抵抗を試みて武士たちと乱闘に及んだと報じられている。その他一連の人々が追放に処せられた。「熊谷家文書」中に含まれる一つの覚書によれば、全部で 11 人が殺害され、6 人が追放されたことになっている。』70 頁

* 『熊谷豊前守元直』H・チースリク著 キリシタン文化研究シリーズ 17

『次に、その家臣はその場におり一部始終を見た後無事に存命していたことである。しかも元直一家が殺された後、屋敷の中で居合わせた家臣が殺されたとか包囲していた者との間に切り合いがあって、多くの死傷者が出たとか言う事は一言も言ってはいない。大体そのような事が起こるならば誅殺の一部始終を居合わせて証言できる家臣などいるはずがないのである。後述するが中原善兵衛とか三輪八郎兵衛に対しての上意討ちでは、執行者が死んでいるが数は知れている。これまた後述するが熊谷一党として追放された者が何名はいるもののそれを犠牲者として考えて数に入れるとしても 20 人にも満たない。パジェス（イエズス会の記録）が 100 人以上の犠牲者が出たというのは何を根拠にしているのか真に疑わしい。戦国時代の戦闘それ自体で 100 人の死者が出る等という事は大変な事である。』 51～52 頁

『いずれにせよ、確証はないが 100 人以上の犠牲者というのは、飽くまでもイエズス会年報の言う様に噂であったと考えるべきであろう。』 67 頁

* 熊谷元直等誅殺事件 36～73 頁 長防切支丹誌・改訂版 アウグスチノ岩崎太郎著 自家本

盲目の伝道師ダミアンの殉教

その 3 日後、1605 年（慶長 10 年）8 月 19 日夜、盲目の伝道師ダミアン（45 歳）が、湯田一本松の処刑場に於いて、斬首に処せられ殉教している。

『（ダミアンは）処刑される予定の場所に着くと、すぐに跪坐し、大声で幾つかの祈りを唱え、それから、暫時心の中で祈り、最後に、しっかりと何の動揺も悲しみも見せず、むしろ、それを永久に享受しに行く人のように大いなる安らぎと喜びを見せて首を伸べ、一撃を受け、斬首された。』
（ジョアン・ロドゥリーゲス・ジランの書簡）

斬首されたダミアンの遺体は、細かく切断され川に流された。次の日の早朝、仲間の信徒（ベント）が搜索し、川沿いの木立の中に、隠し忘れたダミアンの首と片腕を見つけた。

殉教者ダミアンの遺骸は鄭重に長崎のセルケイラ司教の元に届けられ、1601 年に建てられた長崎の岬の突端に建てられた『被昇天のサンタ・マリア教会堂の礼拝堂に安置された。』と述べられている。被昇天のサンタ・マリア教会は現長崎県庁付近にあった。

* 参考史料

セルケイラ司教の報告書 1606 年 3 月 10 日付け

1605 年 8 月 19 日、一人の日本人のキリシタン、ダミアンという盲人がキリストの信仰のために山口で遂げられた死去について 91～132 頁

『熊谷豊前守元直』あるキリシタン武士の生涯と殉教 H・チースリク著

キリシタン文化研究シリーズ 17、キリシタン文化研究会

1607年（慶長12年）、山口教会の中心人物、ユスティノ狩野与五郎とその妻が、湯田一本松に於いて、火刑に処せられ殉教している

『三日間、山口の街路を引き回して恥辱を与えた後に生きたまま火焙りにした。』

（ジョアン・ロドゥリーガス・ジラン、1613年1月12日付の書簡）

長門教会の柱石・メルキオール熊谷元直、盲目の伝道師・ダミアン、信徒達の中心・ユスティノ狩野与五郎を失って以来、長門・周防の教会は閉鎖され、神父は訪れることができなかった。イエズス会『1611年度日本年報』には、『昨年（1609年）そこ（萩）に行ったのは修道士【アンデレ斎藤】だけであつたので・・・』とある。ともに行ったカミロ・コンスタンチオ神父はその容貌で神父であることが一目で判り、逮捕され殺害される危険があまりに大きかったので、旅を途中で断念して日本人の修道士【アンデレ斎藤】だけが迫害下の信徒達を訪ねている。小倉にいる3人の神父のうち、日本人は伊東マンショ神父だけであり、迫害の激しい萩・山口に、怪しまれずに潜入して宣教活動を遂行できるただひとりの司祭だった。逮捕されれば殺害される危険を犯してまで遂行しなければならない宣教の旅。伊東マンショ神父の心の葛藤と不安、斬首、火焙りなど、死への恐怖と戦慄は計り知れないものがあつた。また、伊東マンショ神父の心を苦しめた懐疑と葛藤に『神の沈黙』があつた。本来、キリスト教は、人を励まし希望を抱かせ、幸せに生きるためにある宗教なのに、なぜ、そのキリストを信じる信仰故に、悲しみ、苦しみ、迫害されて拷問を受け殺されるのか、なぜ、神は黙しておられるのか、祈りのうちに問いかけても答えのない不条理の重圧に伊東マンショ神父の心は押し潰されていた。キリストを信じる故に殺されるという、あり得ない事、起こってはならない事が、伊東マンショ神父の前に現実として起こっていた。神父としてなにもできない無力感に打ちのめされていた。信徒達を見捨てるのか、キリストを棄てて生きるのか、キリストを棄てずに自分が殉教するのか、そこには『沈黙する神』の答えを求めて苦しむひとりの信仰者の姿があつた。

『涙とともに種まく人は、喜びのうちに刈り取る。種入れをかけて、泣きながら出て行く人は、束をたずさえ、喜びながら帰ってくる。』 詩篇 126 篇 5 節

詩篇の言葉に生かされて、迫害の恐怖と戦慄を克服して、神に信頼し全てを神に委ねて雄々しく立ち上がり、迫害下に怯えながらも神を信じている長門・周防のキリシタン達を慰めるために、伊東マンショ神父は殉教を覚悟して宣教の旅に出ていった。

【神父達の伝道の苦勞】

常に死と隣り合わせの宣教の旅は、極限の緊張を常に伊東マンショ神父に強いた。布教への熱意と自分を匿う信徒（大概はその町の重立った人々・庄屋・名主・裕福な商人・高名な武士）を危険に曝すのではないかという恐れを抱きながら日々を過ごしている。そして、信徒の助け

を借りながら不安げな足取りで移動のため次の場所へと踏み出すのだった。神父達を匿う信徒達も、もし見つかり訴えられたら、一家全員が拷問の末に処刑されることを知っていたので、命を懸けて匿っていた。五年後の『1615, 1616 年度日本年報』に、中浦ジュリアン神父や他の二人の神父達がどの様に匿われていたかが詳しく記載されている。伊東マンショ神父も同じ辛い体験をしていたことが理解されるだろう。

『1615, 1616 年度日本年報』より

『私（中浦ジュリアン神父）は1年間に3度小倉へ行きました。それも辛い苦勞をし、明らかに生命にかかわるような危険を冒しながら夜を日に継いで歩いていったのです。豊後には2度行きました。そして各地で大勢の人々の告白を聴きました。しかし、そこで私が滞在していた家からほとんど外へは出ませんでした。なぜなら、それらの町々で私を匿ってくれた人々が（彼らはそれぞれの町で重立った人々でした。）私に外出することを許さなかったからです。そのため、私は、忍耐強く主の御慈悲にすがりながら、不安や部屋の窮屈さ、寒さ、暑さ、飢え、渇きなど私の人生で（それまで）経験したことがないほどの辛い苦しさに耐えたのです。私は、すんでのところ命が危ういほどの病気に3度陥りました。夜歩きながら何度となく倒れ、足を捻挫しました。主に讃えあれ。私たちはこのような苦勞を、楽しく時を過ごせるようになるためではなく、我らのキリシタンの信仰と敬虔さを鼓舞しようとして耐えているのです。それも、より自由に主に奉仕できる日が獲得できるように、この（日本の）教会に天にまします主が平和をお与え下さる日まで。』

『ここは私が身を隠してられるような隠れ家ではありません。入口以外には穴一つなく、わずかに、窓がわりに（幅）2パルモ【42センチ】ほどの隙間があるだけです。このとても暑い季節に、私はこの場所で6日間も激しい暑さに耐えながら閉じこもっていました。6日目に私は公然と聖務を行い、その後で自分の巣に戻りました。もうこれ以上、見つからずにここに留まることはできません。』

『私は、現在私が滞在している背の低い藁ぶきの湿気の多い小屋の、明かりを奪われた暗闇の中で、小さな明り取りから差し込む光を頼りに教会法の定める時刻に祈りを捧げています。私はこの小屋に昼も夜も潜んでいるため、あふれるほどの湿気のせいで（起こる）腰や足の痛みにより、何日もの間（満足に）休むこともできないほどでした。私の匿い主は（私という）秘密について非常に用心深いため、全員がキリシタンだというわけでない使用人や、まだ幼い子供達を信用するわけにもいかず、とても遅い時間になってから同宿の手を通じて私のもとに昼食を届けさせていますが、それも、少量の米と副食としては塩漬けの鰯だけというわずかなものです。私はしばしば「暗闇の朝課・テネブレ」を変更せざるを得ません。というのは、（告白を）必要としている何人かの人々の（もとに）告白を聴きに行くために、深夜になって夜中の人々が深い眠りに落ちるまで待たなければならず、そのような場合には約束の場所に到着するのが明け方になってしまうからです。にもかかわらず、告白を聴くと、このような困難の中に

いるのに、私は自分の心が、何の疑いももたれることなく自由に日本中を歩き廻ることができた頃よりも、ずっと伸々していると感じます。同じような慰めを身体の中にも感じます。それは（私にとって）ほとんど取るに足らない不快さや苦痛よりは、古くからの嫌気から解放されたと感じられるからです。』

また、その旅は、島原のジアンノネ神父の『1619年報告』にあるような旅だったと思われる。

『私達は常に夜間、日本の着物を着て雨や風の下に歩き、山中の百姓家に泊まり、自分に委せられた地区に於いて各自、あるときは自ら秘蹟を授け、あるときは手紙によって信者を励ましています。』

『山や谷の中の困難きわまる道を夜間歩きまわり、再び信仰を取り戻したこの地方のキリシタンに秘蹟を授けながら村から村へと仕事を続けています。』

萩と山口への伝道と信徒組織の構築

毛利の城下町・萩には迫害に曝されている信徒達が300人いた。伊東マンショ神父は、萩（及び山口）の信者達が一層助け合うことができるようにキリシタン信徒組織（コンフラリア）を各地に創設した。禁教下、巡察師ヴァリニアーノの教えた信徒結束を図るための組織（コンフラリア）を作り、迫害に備える教えを見事に実行している。

イエズス会『1611年度日本年報』には

『小倉のレジデンシアからひとりの神父【伊東マンショ】は長門・周防両国へ巡回を行ってそこに散在している信者達を訪れた。彼はその巡回にあたってかなりの成果を納め、聖体を受けられる人々に、告解、聖体両秘蹟を授けたが、それも、或る人々には初めてであった。教理の説教を聴いた70人の成人に洗礼を授け、また信者達が相互いをいっそうよく助け合うために、或る所でサンタ・マリアのコンフラリア（信徒組織）を設立した。

彼が訪れた場所の中に毛利の城下町（萩）もあった。そこには300人の信者がいたが、しかし目下、そこに必要であるから、できるだけすべてを密かにした。昨年そこに行ったのは修道士【アンデレ斉藤】だけであったので、このたび神父【伊東マンショ神父】がそこに行ったのは初めてのことであった。そこで彼らは神父の訪問で大きな慰めを得、勇気づけられ、今後もそこを訪ねられるように門戸が開かれた。

神父【伊東マンショ神父】はまた、よく信仰を続けてきた山口の古い信者をも訪れたが、彼らからもたいへん歓迎され、もてなしを受けた。その町の奉行は異教徒でありながらキリシタン達に反感を示さず、かえって好意を寄せているので、神父は何の妨げもなく、そこでまったく自由に聖務を遂行することができた。そして神父は彼を訪問して、彼自身もまた神父を訪れて神父に対して数々の世辞を言い、最も丁寧な言葉と友情の印を表していた。そして神父の出発にあたっては、彼は街外れまで見送り、別れのときに、神父がキリシタンを訪問するため山

口へ来る場合、いつでもまったく自由に、また公にそれをしてよい、また何の心配もなく何日でもそこに滞在してもかまわない、そしてもしも毛利がそのために怒るならば、自分がその責任をとると言った。このようなわけで、これからはいつも自由に、かの地のキリシタンを訪問することができるから、彼らも、神父自身も非常に勇気づけられた。』

(ロドリゲス・ジラン神父、1612年3月10日付け・長崎)

山口では、キリシタンに対して理解ある徳の高い奉行が宣教の許可を与えてくれ、伊東マンシヨ神父は自由に信徒達を訪問して慰め、告解を聴き秘蹟を授けている。萩での命を懸けて行った秘密裏の宣教とは違い、山口での働きは伊東マンシヨ神父の心に大きな喜びと慰めを与えた。ここでも将来の迫害に備えて信徒組織(コンフラリア)を組織している。

【日向・飫肥への伝道】

この後(1611年)伊東マンシヨ神父は故郷・日向の国・飫肥に伝道のため訪れている。故郷には、母・町の上、弟・ジェスト伊東勝左衛門、姉・御虎(故伊東祐勝の妻)藩主伊東祐慶(すけのり)をはじめ、親戚の中にも多くのキリシタンがいた。前回の長門・周防とは違い、飫肥は迫害の心配のない、喜びに溢れた心穏やかで安らぎに満ちた故郷だった。飫肥では城内に迎えられて、もてなしと破格の待遇を受け、家臣達に教理を教え、約50人に洗礼を授けている。

伊東マンシヨ神父がどの道を通って飫肥に行ったかイエズス会の報告には記載されていない。しかし、イエズス会の上層部が豊後、及び日向領での新たな布教を考えていたことから、豊後、日向領に住んでいたキリシタン達を慰め励まし、告解を聴き秘蹟を授けながら巡回したのである。現在までキリシタン遺物やキリシタン墓等が残され、キリシタン事例等が報告されている土地を探してみると、豊後(大分県)では、豊後高田市、杵築市、別府市、湯布院町、大分市、野津町、臼杵市、津久見市、佐伯市、本匠村、直川村、宇目町、日向領(宮崎県)に入って、延岡市、日向市、高鍋町、高岡町、宮崎市、清武町、北郷町、都城市、日南市、飫肥。ほぼ東の海岸線(現在の国道一 号線)に沿ってキリシタンの足跡が確認できることから、おそらくこれらの土地の信徒達を訪問しながら飫肥へ行ったと推測される。

『同じ神父(伊東マンシヨ)は、日向の国の重要な土地(飫肥)日向の国の大部分を治める領主である異教徒の親族(伊東祐慶)に呼ばれて行き、その城下に住んでいるキリシタンを訪問した。殿自身も、多くの家臣と共に教理の説教を聴き、その真理を理解して、信仰が救霊のために必要であることもよく悟っていたが、しかし或る人間的な理由のため、すぐに洗礼を受けることを遠慮した。しかしそのとき、ある家臣とほかの人々、約50人の成人が洗礼を受け、彼らも、神父自身も、大いに満足した。なお神父はそこにいる少数の信者の告解を聴き、準備の出来た人に聖体の秘蹟を授けた。このような成果を納め、そして将来そこへ出かけるたびごとに一層大きな成果を納める希望を持って、神父は(小倉に)帰ってきた。』

(ロドリゲス・ジラン神父、1612年3月10日付け・長崎)

【豊前に於けるキリシタン迫害】

1610年を境に、今までキリシタンを保護していた細川忠興が、徳川家康と幕府の圧力により徐々に態度を変え始めた。家康よりキリスト教と手を切らなければ細川藩を潰すと脅されていた忠興は、幕府に対して弁明するかのように積極的に仏教を擁護し始め、キリスト教と訣別する機会を探っていた。そのような時、1610年(慶長15)8月20日、細川忠興の父、細川幽斎(77歳)が京都で亡くなった。この機会を捉え、忠興の心(政策)は急速に仏教に傾いていった。同年、9月18日、小倉に於いて盛大に仏式で細川幽斎の葬儀が執り行われた。翌年1611年(慶長16)2月、小倉教会の真近く北側3軒隣(現・北九州市立医療センター、馬借町)に、忠興の亡き父・細川幽斎のために菩提寺・泰勝寺を建立している。

小倉教会の北隣には細川忠興の妻・玉ガラシャの御廟、秀林院が建っていた。

『細川公の時東曲輪旦過橋に西向うに泰勝院(細川幽斎菩提寺)泰嚴寺(織田信長公を祀る)秀林院、以上三ヶ寺相並であり細川公の建立也、細川公肥後に国替えの際。右の三ヶ寺共に移りしが秀林寺はその後断絶せり』小倉市誌上(48頁)

『小笠原時代に至って泰勝院のあとに宗玄寺が建ち泰嚴寺のあとは開善寺となり秀林院のあとは峰高寺となった。峰高寺は島原乱の討伐に向かった幕府軍の総師板倉内善正が宿泊後延焼した。一説に宿泊前に焼失したとも云う。その後、寛文元年(1661年)京町筋の東詰にあった浄喜寺のあとに移転し、峰高寺の在った所は御船入の内になった。現在の市立病院から住吉神舎境内にわたる一円のうち、その一部が峰高寺址であり秀林院址である。

秀林院とは秀林院殿華屋宗玉大姉の法号によったもので、細川忠興の夫人、玉子の方の霊を祭った寺であった。今の馬借町一帯は、以前篠崎村の一孤島、船岡島であったが、いつしか陸繋島となって、島の姿は消えている。ここに泰勝院を始め三ヶ寺が建立された。

建立年代は、はっきり判らないが、細川幽斎が慶長15年(1610年)8月20日京都で逝去し9月13日遺骨が小倉に着いたが、翌16年(1611年)父の菩提のためとて瑞雲山泰勝院を建立したとあるから、先づその頃三ヶ寺が建立されたのであろう。』

『細川忠興が小倉城主となるや、夫人を追慕するの情にたえず片身の品を零代(たましろ)として祀ったのが秀林院である。秀林院は細川氏が肥後国替えと共に肥後に移ったが、間もなく断絶した。秀林院のあとには峰高寺が建立された。峰高寺の寺名は小笠原秀正の室、福姫の法号峰高殿によるもの、夫人は家康の孫女である。小笠原氏の転封と共に移ってきて寛永9年(1632年)小倉に建立された。』93~94頁

*小倉のきりしたん遺跡 木島甚久 記録第1集 小倉郷土会刊

イエズス会『1611年度日本年報』によると

『暴君（細川忠興）の悪しき魂は、いっそう明らかにその正体を現し始めた。すでに公然と軍勢中の信徒は信仰を棄てるよう迫られているし、はっきりこうも言っている。『予の国には伴天連もキリシタンもいない。グレゴリオ・デ・セスペデス神父が生きている間は我慢しよう。彼への愛があるから、すべてを破壊せずにいるのだ』と。暴君は我らを国から追放した後、その空いた場所に何を作ろうかともうすでに構想を練っていた。それどころか、我らの教会近くの土地を手に入れて、亡き親のため、寺院を建立していた。このような事態のおりに、デウスはその正しい御判断でグレゴリオ神父を我らから取り去ることを欲し給うた。すでに述べたように、グレゴリオ神父が暴君の衝動を抑えている唯一の者であった。暴君は、その死を待って我らに対する攻撃を実施すべく命令を下した。神父の死後2日目に、我が国においては教会も司祭も必要ないことを知らしめ、追放するゆえ、中津か、必要なことがいっそう好意をもって得られる他の地へ去るようにと命じた。』

* 1611年度日本年報 ジョアン・ロドゥリーゲス・ジラン神父報告

『16・17世紀イエズス会日本報告書』 第二期 第一巻 239頁

指導者セスペデス神父、伊東マンショ神父、コンスタンチオ神父達は、目の前で繰り広げられるこれら一連の細川忠興の暴挙と仏教への心変わりを、不安な気持ちで受け止めていた。充て付けるように強引に教会の真近く（北側三軒隣）に建てられた細川家の菩提寺・泰勝寺を見て、将来に対する不安な予測、迫り来るキリシタンへの迫害の予兆をはっきりと感じ取っていた。セスペデス神父が豊前中津で伝道を開始した1600年から1611年12月までの12年間、セスペデス神父（60歳）、伊東マンショ神父（42歳）、コンスタンチオ神父（40歳）清田朴斎（50歳）、加賀山隼人（46歳）、小笠原玄也（25歳）、この人達の働きは素晴らしい実りを小倉の地にもたらした。しかし、豊前における教会の繁栄も細川忠興の心変わりの前に風前の灯となっていた。

セスペデス神父の突然の死去

1611年（慶長16）12月降誕祭（クリスマス）の少し前、豊前地方の主任司祭であり指導者だったセスペデス神父が脳卒中で突然に死去した。セスペデス神父の死去のとき、伊東マンショ神父が傍らにいたことが報告されている。

イエズス会『1611年度日本年報』には

『今年度死去した第4番目にして最後は、スペイン人でマドリッド生まれのグレゴリオ・デ・セスペデス師である。彼は霊的指導司祭で、既に60歳になっていた。イエズス会に入って42年、その34年間は日本で、終わりを迎えた。靈魂の救済に情熱をもって、その労力も絶えることなく努力していた。この情熱は特に豊前の国の教会で示されている。

豊前は、彼が最初に種を蒔き、時間をかけて水を与え、われらの主は、日々新たな芽と、そ

の成長をもたらし賜うた。しかし、短時間に国中すべてを改宗させたい望みを持っていた師にとって、その芽の成長は小さくないとはいえ、満足するには至っていない。

しかし、それ以上のものを望んでいたにもかかわらず、その国の国主、越中（細川忠興）殿の災いによって妨げられた。我らの主は、師父の死とともに、その者をキリストの羊の群れに連れ戻そうとする希望を、ことごとく断ち切られた。続いてその教会で起こったことは、師父の死の意味を一層大きなものとした。その死の有様は、我々をも、新たなキリシタンをも一層深い悲しみに誘った。

師父は新管区長と巡察士に挨拶のため長崎に赴き、自らの教会の帰途にあった。修道院の門前に帰り着くと、いつものように我らは愛と好意をもって出迎えた。師父が数歩進んだとき、急に目眩（めまい）がしてよろめき、伴侶の一人（伊東マンショ神父）の介添えがなければそのまま倒れていたであろう。そして伴侶に抱えられたまま、苦しい様子でさらに数歩あゆむと、支えていた伴侶とともに地面にひれ伏し、二、三度、『デウス様、お慈悲を』とだけ言うと、出迎えに集まっていた大勢のキリシタンのいる前でそのまま死去した。今頃は、長年耐え忍んだ苦勞の報いとして、天上の生活を享受しているであろう。

これは日曜日の朝、主日のミサに与かるために大勢のキリシタンが教会に集まっている時に起こった。集合していたキリシタン達は司祭に会って、健康な姿がまた見られると思っていたのに、司祭が亡くなられたというので、呆然とし、その場に駆けつけた。深い悲しみに打たれ、誰もが皆、その情愛溢れる師父の死を、涙を流して惜しんだ。

師父が亡くなられたその土地の領主（細川忠興）は、その土地に埋葬することを許さなかったので、長崎に運ぶために遺骸を柩（ひつぎ）に納めようとしている間にも、キリシタンの群れは次第に増えていき、昼夜を問わず、限りなく深い悲しみを見せ、師父の足を抱きしめ口づけしたりして、とどめなく涙を流していた。

この悲しみの情は、葬儀の行われた時に一層の極みとなった。柩が閉ざされた時の皆の嘆きは、実の父が死んだ時にも勝るとも劣らぬものであった。彼らに対する師父の大きな愛、あの慈悲に満ちた顔、情愛深い優しい物腰、どのような困難でも、あらゆる企てに飽くことなく挑戦するあの心意気、魂の偉大な情熱を思い起こせば、誰もが師父を称賛するであろう。

こうしたものが自らに欠けているがゆえに、また全て述べた当地の領主の命令によって、この司祭が死去すると他に司祭がないことを知っているのも、その悲しみは倍加した。当の領主は、グレゴリオ師の死でキリシタン信仰も絶え果てることを望んでいた。しかし師父についての聖性の名声のため、生涯にしふが奉仕した偉業について尋ねる者は多くいた。これまで名を挙げた司祭達の死について聞いていたにもかかわらず、グレゴリオ師の死に際して悲しみは一層深かった。それは、悲しみが広く人々の心に見られたように、その教会が全く師父の命と健康に寄りかかり、彼を非常に必要としていたからであった。それはそれに相応しい箇所ですら『
ジョアン・ロドリゲス・ジエラム神父 1612年3月10日付

* Archivum Romanum Societatis Iesu, Japonica Sinica 57, ff 130-179v

* 1611年度日本年報 ジョアン・ロドリゲス・ジエラム神父報告 1612年3月10日付

『初穂』 カトリック福岡司教区宣教史委員会 147-157 頁

『最後にグレゴリオ・デ・セスペデス神父、彼はスペイン人でマドリッドの生まれ。三請願の司祭で 60 歳に近く、イエズス会に入ってから 42 年、日本在留 34 年であった。

この神父、すなわちグレゴリオは、主に豊前で働き、その教会はからの建てたものであった。彼は長崎からその伝道所に帰るや、卒中により死んだ。彼の死で、同国の大名越中（細川忠興）殿を立ち返らせようという希望は潰れてしまった。』

* 『日本切支丹宗門史』 上巻 254 頁 レオン・バジェス著

『すでに述べたように、グレゴリオ神父が暴君（細川忠興）の衝動を抑えている唯一の者であった。暴君は、その死を待って我らに対する攻撃を実施すべく命令を下した。セスペデス神父の死後二日目に、我が国においては教会も司祭も必要ないことを知らしめ、追放するゆえ、中津か、必要なことがいっそう好意をもって得られる他の地へ去るように命じた。』

『セスペデス神父の死去に伴い、殿（細川忠興）の命令で小倉のレジデンシアが破壊され、伊東マンショ神父と日本人イルマン（斉藤アンデレ）一人が同宿とともにレジデンシアを去った。』

* ヴァレンティン・カルプアリョ神父報告 1612 年 10 月 26 日付け

『16・17 世紀イエズス会日本報告書』 第二期 第一巻 239 頁

細川忠興の神父追放令

細川忠興はセスペデス神父の遺骸の小倉での埋葬さえ許さずに長崎に送るように指示、セスペデス神父の死後 2 日後に、残りの神父（伊東マンショとカミロ・コンスタンチオ）とキリシタン指導者達に対して追放命令を出している。セスペデス神父の死を境にして、細川忠興はキリスト教との訣別を公にして、小倉の教会、修道院を破壊、後任の責任者である伊東マンショ神父を追放した。

『亡命する前に、神父達は賢明にも、信者を幾組織かに分け、各組織（コンフラリア）には特に選抜された一人にキリシタンがついていて、その世話をすることにしてあった。彼等は、この選抜されたキリシタンに臨時の洗礼の仕方や、瀕死の人の補佐をしたり、葬式の仕方に関する知識を授け、更に皆に対しては、最も年を重ね最も経験を積んだキリシタンの中から、補佐者を選んで付けておいた。牧者がいないために、こうして彼等は出来る限りの補佐をした。』

* 『日本切支丹宗門史』 上巻 264 頁 レオン・バジェス著

小倉・中津での信徒組織の再構築

信徒組織（Confraria de Misericordia・慈悲の信心会）とは、信仰共同体における兄弟会を意味している。信仰を生活の基盤として持ち、相互扶助、すなわち互いに助け合い励ましあいながら自分と相手の人格とを高めあうことを目的とした信徒達の共同体として発展していった。キリストにある平等という信念に基づき、地位、階級、貧富などの差別を克服して、相互扶助

を實踐していった。貧しい人々、虐げられた人々（被差別部落・穢多，非人）見捨てられた病人（ハンセン病・癩病等）流浪の乞食等に手を差し伸べていった。これらの人々に対してまず自分達が『共生』を實踐して見せ、賛同を得た回りの人々と共に働き、社会事業として定着させ、結果的には布教活動に結び付けていった。

初めは宣教師の指導の下に自助信徒組織としてのミゼリコルデア・慈悲の組と、コンフラリア・信心会として組織化した。信徒代表がこれを指導して宣教師の下、活動を展開していた。信徒代表は、組親とか組頭と呼ばれていた。信徒組織は定期的に集会を持ち『心業修行』『キリストにならいて』（コンテムツスムンジ）『ドチリイナ・キリシタン』『ぎやどべかどる』『サントスの御作業』『ヒイデスの導師』『スピリッアル修業』等、などの靈的書物を信徒代表が信徒達に読み聞かせて信仰の強化を図っていた。死者の埋葬・教会の管理維持・病人や貧しい人々の世話などの慈善活動を率先して行った。

小倉と中津の信徒組織・コンフラリアは 1600 年、中津でセスペデス神父が働き始めたときには既に信徒の間で組織構築され存在していて、1603 年、中津から小倉に移ったときも、小倉教会の中に存在していた。信徒達の貧しい人々への施し、ハンセン病（癩病）患者への救済、教会の中に設けられていた孤児院での働きなどが、イエズス会の報告書に述べられている。1611 年 12 月、セスペデス神父の突然の死去後、細川忠興の追放命令により小倉と中津から撤退を余技なくされた伊東マンショ神父とカミロ・コンスタンチオ神父が、小倉と中津を撤退するときに構築した信徒組織・コンフラリアとは、既に存在していた信徒組織を再組分けして、各組織に代表者を任命して迫害下に於いて潜伏活動するための準備を整えたと考えられる。各組織の代表者に臨時の洗礼の仕方や、瀕死の人の補佐をすること、葬式の仕方に関する知識を授け、更に最も年を重ね経験を積んだキリシタンを選んで代表者の補佐役とした。この時任命された指導者達の名前を、6 年後の 1617 年（元和 3）8 月に作成されたコーロス徴集文書の中に見ることが出来る。

コーロス徴収文書に記載された小倉・中津の信徒代表者達

*コーロス徴収文書とは 1617 年（元和 3）8 月 24 日、豊前の国小倉、8 月 25 日中津、両町のキリシタン代表者達がイエズス会日本管区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、小倉 31 名、中津 17 名の指導者の名前が記録されている。

コーロス徴収文書は日本在住の托鉢修道会から、イエズス会の指導司祭たちは迫害の下、日本人信徒を見捨てて信徒達に躓きを与えているとの非難に答えるために、全国各地の信徒代表者から証言を集めることにした。この文書は日本文に訳文を添えてヨーロッパに送られた。私達はこのコーロス徴収文書により、1617 年（元和 3）の日本に於ける各地の 755 名の信徒代表者の名前を正確に知ることができる。この最高機密書類はプロクラドルといわれた日本イエズス会の代表者がヨーロッパまで肌身離さず携帯して行った。文書収集の過程は秘密裏に行われたが、この様な指導者達の署名徴収は日本では初めてのことであり、潜伏していると言っても

キリシタン界での公けの大きな動きは小さな漣（さざなみ）を表面に立ててしまう。文書収集の過程で機密が官憲に漏れた地方の徴収文書もあったと推察される。秘密裏に作成された文書から機密が漏れ壊滅的弾圧迫害を受けた地方があることを、その後の殉教の事実と歴史が物語っている。小倉中津の豊前地方に於ける弾圧迫害の過程を見ると、細川忠興側に秘密が漏れた徴収文書の写しがあるように推測される。あるいは拷問により棄教させられた信徒が徴収文書のことを白状したのかもしれない。なぜなら、コーロス徴収文書が書かれた次の年、1618年2月末から8月初めにかけて62名という多くのキリシタン達がコーロス徴収文書に記帳した指導者達と共に殉教している事実がそれを物語っている。

* 『近世初期日本関係南蛮史料の研究』 松田毅一 風間書房 1967
第六章 元和3年、イエズス会士コーロス徴収文書 1022~1145頁

小倉のキリシタン代表者の名簿 31名 1048~1050頁

御出世以来千六百十七年（1617年）元和参年八月式四日

松野はんた理庵、松野ふらん志すこ、小笠原寿庵、結城志ゆすと、中村志ゆすと、加賀山了五、山田寿庵、清田志門、大串寿庵、大西了五、田中（安）あてれ、関備世天、菅原ちにす、大野満所、宮崎寿理庵、鷹巣ろまん、大串志もん、角野ミける、木付はうろ、吉良志もん、佐田とめい、甲斐志よらん、糸永理庵、了意志もん、田代理庵、田吹（安）あてれ、薬師寺志めあん、米や寿庵、ぬしや寿庵、ときやへいとろ、をひや寿庵。

中津のキリシタン代表者の名簿 17名 1051~1052頁

御出世以来千六百十七年（1617年）元和参年八月式十五日

久芳寿庵、櫛橋理庵、川井寿庵、小嶋パウロ、志賀ビセンテ、内田寿庵、矢田ジャコウベ、内山トウマ、田房ベント、内田シモン、久恒寿庵、同シモン、蠣瀬自庵、推田ペイトロ、御手洗彥すて八ん、今永トメイ、魚住たい里やう。

1611年（慶長16）12月、セスペデス神父の突然の脳卒中での死により、細川忠興の暴挙を止めるものが何もなくなってしまった。細川忠興はセスペデス神父の遺骸の埋葬さえ許さずに長崎に送るように指示、セスペデス神父の死後2日後に残りの神父とキリシタン指導者達に対して追放命令を出している。セスペデス神父の死を境に、細川忠興はキリスト教との訣別を公にして、小倉の教会を破壊、後任の責任者である伊東マンショ神父を追放した。伊東マンショ神父は、加賀山隼人・清田朴斎の忠告により、忠興の息子・細川忠利を頼り、中津に避難、そこでクリスマスミサ（降誕祭）を盛大に行っている。その後、中津に於いても残されるキリシタン達がこれから起こる迫害に耐えられるように、また互いの信仰を良く助け合うために、幾つかのキリシタン信徒組織・コンフラリアを編成した。カミロ・コンスタンチオ神父はしばらくの間、長門の国・下関に留まり、小倉の動向を見ながら、小倉の信徒達を励ましていたが、堺

に行くように遣わされて移動した。

伊東マンシヨ神父の死去

丈夫でなかった伊東マンシヨ神父の健康は、前年の仕事（長門・周防・飢肥の旅）や、迫害の勃発、命を懸けて築いてきた小倉教会の破壊と消滅という試練に耐えられなかった。体に違和感を覚え、長崎のコレジヨ（現・長崎県庁）に戻り、父のようなディオゴ・デ・メスキータ神父と、盟友・原マルチノ神父に見守られながら、1612年（慶長17）11月13日に死去（43歳）した。おそらく臨終前には、同じ盟友である中浦ジュリアン神父も赴任地である筑前博多、または筑後秋月（甘木・今村）のレジデンシアから駆けつけたと考えられる。

* 『秋月のキリシタン』 H,チースリク著 110~114頁。参照

イエズス会『1612年度日本年報』に伊東マンシヨ神父の死亡が簡素に報告されている。

『今年死亡した会員の2番目は、伊東マンシヨ神父であった。日向の国の出身で、43歳。彼は1584年にローマへ行った四人の正使であって、帰国してから世間のすべてのことを捨てて、1591年に我が会に入った。会で過ごした21年の間、彼はその修道者としての忠実と靈魂の救いに対する熱意によって、皆に感化を与えた。』

* マテウス・デ・コーロス神父報告 1613年1月12日付け

Matheus de Couros S.J. Jap Sin. 57, f. 192:

『16・17世紀イエズス会日本報告集』 第二期 第一巻 283頁

伊東マンシヨ神父の死亡原因の病気について、臨終に立ち会ったメスキータ神父の一年後のイエズス会最高責任者・アクアヴィヴァ総長宛の1613年11月9日の手紙には、はっきりと『肋膜炎のようでした。』と述べている。

『ここにいる日本人の神父達について総長様には次の事を申し上げることが出来ます。彼らは今までよくやりましたし、それは私達が期待していた以上です。伊東マンシヨ神父は既にこのコレジヨで皆に立派な模範を示し、安らかに自分の道を終えました。病気は肋膜炎のようでした。神の奉仕と靈魂の救いのためによく働きました。』

* デイオゴ・メスキータの日記 1613年11月9日付 Jap Sin 36. 27~28v

『天正少年使節・史料と研究』 168頁 結城了悟著

純心女子短期大学・長崎地方文化研究所

【伊東マンシヨ神父の死亡原因の考察】

メスキータ神父の供述により伊東マンシヨ神父の死亡原因と記述されている肋膜炎【胸膜炎】についての考察。

肋膜炎【胸膜炎】について

胸膜炎とは、肺の外部を覆う胸膜（壁側胸膜＝肋膜・肺胸膜）に炎症が起こる疾患であり、かつては肋膜炎と称されていた。それ自体で発症することは少なく、ほとんどは癌や結核、肺炎などの後に発症することが多い。

原因による分類

1、癌性胸膜炎

肺癌をはじめとするほかの部位にできた癌の肺への転移などによるもの。

悪性腫瘍が直接胸膜に浸透したり、胸膜への転移が起こると胸水が溜まる。

原因としては肺癌が最も多く、そのほか、いろいろな部位の癌（胃癌，頭頸部癌、悪性リンパ腫、乳癌、卵巣癌）でおこる。まれに、胸膜から発生する悪性中皮腫が原因となることがある。

2、結核性胸膜炎（結核菌による胸膜炎）

肺結核をはじめとして結核菌によるもの。結核菌の感染によって起こる胸膜炎で、一般には肺内に結核病巣があり、それが胸膜に波及して発症する。胸膜炎の中で癌性胸膜炎とともに多く発症する。

3、肺炎随判性胸膜炎・その他の疾患による胸膜炎

細菌性肺炎や肺化膿症、気管支拡張症など、肺に細菌が感染したことに伴い、胸水が貯まる状態。胸膜への細菌感染を伴い膿が出る膿胸と、伴わない場合がある。

4、膠原病に伴う胸膜炎

慢性関節リュウマチ、全身性エリテマトーデスの経過中にもしばしば胸に水が溜まることがある。

5、心臓疾患や肺疾患、腎臓疾患、等に伴うもの。

心不全、肺梗塞、ウイルス感染、消化器疾患、腎臓疾患が胸膜炎の原因になることもある。

症状

- 1、胸の痛み（胸水が溜まることによる痛み）
- 2、呼吸困難（胸水が溜まることによる呼吸困難）
- 3、発熱、咳、痰、血痰、等

漿液性滲出性胸膜炎

胸膜に炎症が起こると、多くの場合、胸膜腔内に液体が溜まる。これを漿液性滲出性胸膜炎という。胸膜に溜まる液の量は原因にもより違うが、一般的に胸膜の冒され方が強く、その範囲が広いほど多量の液が溜まる。結核の初期に起こる胸膜炎、結核炎以外の細菌による軽い胸膜炎やウイルス性の胸膜炎等では、麦わら色の比較的透明な漿液が溜まるが、炎症が強い場合に

は、血液の混じった茶色の漿液が溜まる。

膿胸性胸膜炎

結核炎以外の細菌による肺炎や肺化膿症に胸膜炎が併発した場合、あるいは、結核性であっても、肺結核の空洞（内容は多数の結核菌や膿）が胸膜腔に破たり、結核菌に加えて他の細菌が混合感染を起こした場合は、胸膜腔に溜まった液体は、多数の白血球のために膿となる。これを膿胸という。膿胸は、主として細菌により引き起こされた化膿性胸膜炎であり、ただ、漿液性滲出性胸膜炎と異なるところは、細菌が胸膜腔へ達する道筋が肺や肺門リンパ節からだけでなく、肺を取り巻いているいろいろな部分から入って、胸膜腔を汚染する場合が多い。

以上、メスキータ神父により報告されている、伊東マンショの死亡原因と記述されている肋膜炎・胸膜炎について述べたが、胸膜炎との因果関係が、癌性の胸膜炎なのか、結核性の胸膜炎なのか、肺炎からの胸膜炎なのかの結論には至っていない。

その当時、結核は労咳と呼ばれ非常に多い不治の病気であり、その症状は明確に認識できていたから、伊東マンショ神父の死亡原因が結核性肋膜炎であったならば、死亡原因として労咳による肋膜炎と記載されたと考えられる。従って癌性胸膜炎、もしくは肺炎からの胸膜炎であった可能性が疑われるが、それも推測の域を出ない。伊東マンショの死に際がどうであったか、どの様に死んで逝ったかまでは断定できなかった。しかし現代医学の臨床結果から、伊東マンショの死亡時に於ける胸膜炎での死に際は、発熱の中、呼吸困難を伴い、血液混じりの茶色の漿液を吐きながら、徐々に衰弱して死亡した。死後間もなくして、死後硬直と気圧により、肺に溜まっていた多量の血液混じりの茶色の漿液が遺体の口と鼻から滲みでてきたと、死亡時の状態がおおよそ想像できるのではないかと思う。【患者により個人差があるので断定はできないが、弱りきった患者の場合は静かな臨終もありえる。】

宣教師と煙草（たばこ）との関係

『九州にはキリシタンのものと思われる墓碑に煙草と茶道具を描いたものが数基ある。まず、煙草だが、ただ単にこの墓碑の人が、煙草が好きだったからということから描かれたものではなかろうと思われる。特に多いのは鹿児島県の川内市や宮崎市に近い高岡町あたりであるが、鹿児島県の川内は早くから南蛮貿易が盛んに行われた所であり、フランシスコ・ザビエルも鹿児島に布教した後、川内に立ち寄り平戸へ向かっている。また 1602 年にはドミニコ会の宣教師ら 3 人がここ川内で布教活動を始め 1606 年には教会と病院を建て、1612 年の禁教令が發布されるまで、天草のコレジヨ（大学）の地とともに南九州の布教の中心地であった。このような歴史的背景の中で南蛮貿易と共に神父によって、「たばこ」がこの地にもたらされたものではなかろうか。そしてそれが神父の象徴となりキリシタンのシンボルとなったのではなかろうか。島原の吉田安弘氏も墓碑に煙草が刻まれたものを見たことがあるといわれる。ここ川内だけの現象ではなさそうである。

たばこの歴史をみると、身近な史料では「松田唯雄著・天草近代年譜」によれば、1605年（慶長10年）「南蛮船煙草を伝来しおおいに流行ス」とあり、さらに慶長13年（1608年）と15年（1610年）には、「幕府これを禁ズ」とある。この頃公的に大量輸入されたということは、私的にはもっと早くから貴重なものとして扱われていたことは事実で、そうなれば、やはり神父の渡来と共にたばこも日本にもたらされたものと考えられる。』

* かくれキリシタン・信仰の証 141～142頁 浜崎献作著 サンタマリア館 1997年発行

【伊東マンショ神父の遺骨の行方について】

伊東マンショ神父の遺骨の行方について、今日数々の流言が聞かれるが、イエズス会年報報告書に従って、伊東マンショ神父の死去（1612年11月13日）後に死去したセルケイラ司教（1614年2月20日）メスキータ神父（1614年11月4日）のふたつの死亡事例を取り上げて、当時の長崎のイエズス会がセルケイラ司教の遺骨とメスキータ神父の遺体をどの様に取り扱ったかを知ることが、伊東マンショ神父の遺骨の取り扱い及び行方を知るうえで必要不可欠なことと思われる。

セルケイラ司教の死去について

『（1614年）2月20日、即ち四旬節（復活祭の前の二週間）の最後の日曜日、司教ルイス・デ・セルケイラ猥下は、信徒の艱難を憂へて重病にかかり、三ヶ月の後、遂に享年62歳で逝去した。彼はイエズス会に在ること48年、日本の教会を主宰すること16年であった。彼は常に賢明に主宰し、教会の勅書のために、他の修道会の修道者達の来朝に反対していながらも、良く彼等と和解していた。彼は7人の日本人に品級（オールドルサクレ）を授け、又3人の日本人に下品四級を授けた。司祭の中から、彼は四人の主任司祭を作り、長崎五教区の中三教区を日本人に任せていた。』

* 『日本切支丹宗門史 上巻』 第16章 1614年 331～332頁 レオン・パジェス著

『司教閣下に対して、素晴らしい葬式が営まれ、遺骸は、長崎のイエズス会の天主堂内に埋葬された。なお此の所は、神父達の墓所で、その側には、有馬で火炙りになった八人の殉教者（1613年10月7日）の墓があった。』

* 『日本切支丹宗門史 上巻』 第16章 1614年 373頁 レオン・パジェス著

参考文献

* 有馬で火炙りになった八人の遺骨について

『シャレコウベが語る』 松下孝幸著 第7章 マカオのキリシタン殉教者 164～178頁
長崎新聞新書

1992年、マカオ・コロアネ島の聖フランシスコ・ザビエル教会に保管されていた59名の殉教者達の遺骨は日本に返還され、現在は長崎西坂の26聖人記念館の栄光の間に安置されている。

メスキータ神父の死去について

『(1614年)11月4日には、ポルトガル人のディオゴ・デ・メスキータ師を失った。師は流されたくないと思い、長崎の附近に匿われていた。彼は教会の惨状を見て心を痛み、発病し、漁夫の苫屋の藁の褥の上で死んだ。享年61歳、イエズス会に在ること41年、日本滞在38年であった。長年、彼は長崎の学林(コレジヨ)の長を務めていた。』

* 『日本切支丹宗門史 上巻』 第16章 1614年 356~367頁 レオン・パジェス著

伊東マンショ神父が葬られた場所が『セルケイラ司教閣下に対して、素晴らしい葬式が営まれ、遺骸は、長崎のイエズス会の天主堂内に埋葬された。なお此の所は、神父達の墓所で』とあり、1601年に建てられた長崎の岬の突端に建てられた『被昇天のサンタ・マリア教会堂の内』であることが述べられている。被昇天のサンタ・マリア教会は現長崎県庁付近にあった。

伊東マンショ神父が教会に於いて最高の儀礼を持って被昇天のサンタ・マリア教会内に葬られたことが分かる。

1614年1月31日(慶長18年12月22日)徳川家康によって全国的キリシタン禁教令と宣教師らの国外追放令が出された。

『各地に降った雨滴の小流が合して大川となり海に注ぐように、追放令によって各地を追われた宣教師や神父達は皆、長崎に集まった。』* 『日本殉教史』トリゴ著

トードス・オス・サントス教会(現・夫婦川町の春徳寺)は各地から避難してきた神父達の宿となった。中浦ジュリアン神父もその中にいた。加賀金沢から高山右近(62歳)一行は2月15日に立ち、2月25日に坂本に到着、1カ月の滞在の後、陸路大阪に出て、海路長崎に送られ4月中旬に長崎に着いた。長崎では上町の『鳥の羽屋敷』に滞在していた『六本長崎記』。長崎での高山右近は絶えず祈り、聖祭にあずかり、殉教の準備に時を過ごし、心霊修行や告白をした。またミゼリコルディアの組に入り社会奉仕事業に参加して隣人への奉仕活動を手伝っていた。8月、山口駿河守直友が宣教師達や高山右近を追放せよとの徳川家康の命令を持って長崎に来た。9月には山口駿河守の子、間宮権左衛門が重ねて督促に長崎に来た。しかし、船の手配も出来ておらず、また北西風も吹いていなかったために出航は出来なかった。長崎奉行・長谷川左兵衛は9月24日、長崎から神父達を木鉢(現木鉢町)へ、キリシタン信徒達・高山右近等を福田(現福田本町)へ、翌25日その他のキリシタン達を十善寺(現十膳町)へと分けて隔離した。

1614年11月7日、マカオ行の3隻のジャンク船に62人のイエズス会員、うち神父36名、3名は長崎港沖で下船して潜伏した。(1614年12月28日付のイエズス会文書)同宿達、3人のベアタス会員等が乗っていた。

11月8日、マニラ行の2隻のジャンク船は村山等安とエステバン・デ・アコスタ所有のジャンク船で、高山右近と娘、孫。内藤徳庵とその家族、内藤ジュリアとその修道女達15人、右近

の指導司祭だったモレホン神父をはじめ 8 人の神父を含む 23 人のイエズス会員、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会員や教区司祭等を合わせて 350 人以上のキリシタン達を乗せてマニラへ向かった。

マカオ・コロアネ島の聖パウロ大聖堂（神の御母教会・マドレ・デ・デウス教会）の中央祭壇の真下の地下墓地に、1614 年 11 月 7 日、長崎から運ばれてきたセルケイラ司教の遺骨、メスキータ神父の遺体が鄭重に葬られている。他には 4 人の少年をヨーロッパに紹介するために、天正遣欧少年使節派遣を計画した巡察師アレッサンドロ・バリニャーノ神父が 1606 年 1 月 20 日、マカオに於いて亡くなった。天正少年使節の一人・原マルチノ神父、少年使節と共にヨーロッパに渡り印刷技術を学び、日本で数多くの本の出版に関わり、マカオで司祭になった日本人ドラード神父等が葬られている。1615 年以後マカオの聖パウロ学院がイエズス会の重要な情報収集基地となり、多くの日本人キリシタン達がこの地で学び巣立っていった。その中には初めてエルサレム巡礼をしてローマまで歩いて行き、1620 年 11 月 15 日ローマで神父になったペテロ・岐部神父（32 歳）がいる。彼は日本の同朋の苦しみを少しでも救うため 8 年かけて日本に戻り、東北地方で司牧して水沢で捕まり、江戸送りになり、江戸小伝馬町の牢獄で 1639 年 7 月 4 日に殉教した。享年 52 歳。

1835 年、マカオの聖パウロ大聖堂（神の御母教会・マドレ・デ・デウス教会）は火災のために消失した。現在も大聖堂の前壁のみが当時の面影を残している。

セルケイラ司教の遺骨、メスキータ神父の遺体の長崎からマカオへの移し替えを見ても解るようにイエズス会は決して神父達の遺骨・遺体を粗略には扱っていない。セルケイラ司教と同じ長崎の『被昇天のサンタ・マリア教会堂の内』に葬られていた伊東マンショ神父の遺骨は 1614 年 11 月 7 日のマカオ行の以前、長崎奉行・長谷川左兵衛が 9 月 24 日、長崎から神父達を木鉢（現木鉢町）へ隔離する以前に堀起こされ綺麗に洗った【洗骨】のち、鄭重に箱に納められたと推測される。骨を洗う洗骨とは、被葬者の肉が腐って骨になるのをまって、その骨を堀上げて洗い別の容器に移し替えて、別の場所に埋葬し直すことをいう、要するに再埋葬の事であり、二次葬ともいう。掘上げられた後、引き取り手のない神父達の遺骨はそのままマカオに運ばれたと思われるが、キリシタンである母親兄弟が飢肥にいる伊東マンショ神父の遺骨は当然、キリシタンである身内の元に返却されたと推測される。それが唯一、遺骨をキリシタン遺物破壊から安全に守る道でもあった。まして飢肥藩伊東家は伊東マンショ神父の実家であり、マンショの遺骨を託すのにこれ以上の安全な場所はない。マンショの遺骨にとっては一番安全な場所であり、永遠に憩える場所であったと思われる。飢肥伊東家に伝承されている話に『伊東マンショの遺骨が母町の上に届けられた時から母町の上は自分が死ぬ時までマンショの遺骨を保管して、自分が死んだときに自分の墓の横にマンショを葬った』と伝えられている。

問題はだれが、何時、伊東マンショの遺骨を飢肥にいる母町の上、弟ジェスト伊東勝左衛門の元に届けたのか？この答えはメスキータ神父の死去の時の状態を詳しく分析すれば、おのずか

ら答えが浮かび上がってくると思われる。

『(1614年)11月4日には、ポルトガル人のディオゴ・デ・メスキータ師を失った。師は流されたくないと思い、長崎の附近に匿われていた。彼は教会の惨状を見て心を痛み、発病し、***漁夫の苫屋の藁の褥の上で死んだ。享年61歳、**』

*『日本切支丹宗門史 上巻』 第16章 1614年 356~367頁 レオン・パジェス著

推論

当時すでに病気だったメスキータ神父は自分の意志で日本残留を決めて長崎付近に匿われていた。同じように日本残留組にあまり顔が知られていない中浦ジュリアン神父が当時の日本管区長カルヴァリヨ神父により島原の口之津の主任司祭として任命されていた。おそらく天正少年使節以来、人生の苦楽を共にしてきた親子のような関係からメスキータ神父より乞われて日本残留を手引きしたのは中浦ジュリアン神父だったと思われる。長崎付近でのメスキータ神父の匿われていた**十善寺の浜の漁夫の苫屋**とは中浦ジュリアン神父の匿われていた場所ではなかったかと推測される。しかし残念なことにメスキータ神父は教会の壊滅していく惨状を見て心を痛み失意のどん底に陥った。心が病めば酷使してきた体が崩れていく。死に至る病の床にあるメスキータ神父を看病し続けたのは中浦ジュリアン神父だったと思われる。中浦ジュリアン神父でなければならぬもう一つの理由が、メスキータ神父の突然の死去(11月4日)後のメスキータ神父の遺体の引き渡しとマカオへの運搬依頼である。

11月7日、マカオへ向けて出港するジャンク船には、日本キリシタン側の責任者の一人に盟友の原マルチノ神父が乗船することになっていた。メスキータ神父の死後、たった3日でメスキータ神父の遺体をマカオ行のジャンク船に乗せるには、中浦ジュリアン神父と原マルチノ神父の暗黙の了解と二人の日本における最後の共同作業、自分達の父親であるメスキータ神父の遺体の引き渡しを無事にすることだった。中浦ジュリアン神父から原マルチノ神父にメスキータ神父の遺体を無事に引き渡したときマカオ行のジャンク船は静かに長崎の港を後にした。それは中浦ジュリアン神父と原マルチノ神父の、この世での最後の別れでもあった。

*十善寺の浜の漁夫の苫屋

現・新地中華街・築町電停から大浦天主下の松が枝橋にかけての大浦海岸通り。

当時は海岸から正面に岬の**サンタ・マリア教会**が見えていた。

十膳寺地区とは、その昔、十膳寺郷であった4つの町の事を指している。長崎村十膳寺郷稲田岳と呼ばれていた稲荷岳、田ノ浦の中から1字ずつとって名付けられた稲田村、館内町、十人町の南東側にある中新町。十人町は万治元年(1658)野母遠見番十人の官舎があったので十人町と呼ばれるようになった。

*岬のサンタ・マリア教会

1571年、長崎の町がキリシタンの町として建設されるようになった時、フィゲレイド神父によ

ってポルトガル人と日本人キリシタン信者のために岬の突端（現長崎県庁舎）に小さな聖堂・サン・パウロ教会が建てられ、この聖堂は『岬の教会』と呼ばれた。1601年、長崎最大の教会『被昇天の聖母教会・岬のサンタ・マリア教会』が建てられた。同時にここにはイエズス会本部、司教館、コレジオも置かれていた。1614年11月、教会は禁教令により破壊された。

*出島

1634年（寛永11）江戸幕府の鎖国政策の一環として、長崎に築造された扇形の人工島。1636～1639年（寛永13～16）ポルトガル貿易、1641年（寛永18～）よりオランダ貿易が開始された。

*唐人屋敷

1688年長崎郊外にある十膳寺郷に幕府が所有する御薬園の土地で唐人屋敷の建設に着手、翌年1689年に完成した。広さは約9400坪に及び、2000人程度の収容能力を持っていた。現在の長崎館内町の地である。周囲は塀と堀で囲まれ、大門の脇には番所が設けられていて出入りを監視していた。1698年の大火で五島町や大黒町に会った中国船の荷蔵が焼失したために、倉庫に目が届きやすい様に、唐人屋敷前面の海を埋め立てて中国船専用の倉庫区域を造成した、この地区が新地と呼ばれるようになった。

中浦ジュリアン神父がもう一人の盟友・伊東マンショ神父の遺骨を飢肥まで運んだのは、この後だったのか、それともそれ以前だったのか？二つの説を検証してみる。

早期運搬説

1614年の早い時期、セルケイラ司教と同じ長崎の『被昇天のサンタ・マリア教会堂の内』に葬られていた伊東マンショ神父の遺骨は1614年11月7日のマカオ行の前、長崎奉行・長谷川左兵衛が9月24日、長崎から神父達を木鉢（現木鉢町）へ隔離するかなり以前に、マカオへ移すために堀起こされ綺麗に洗われた（洗骨）のち、鄭重に箱に納められた直後に、中浦ジュリアン神父の手によって飢肥へ運ばれたと推測される。故郷には、母・町の上、飢肥藩伊東家の首席家老を務めている弟・ジェスト伊東勝左衛門、姉・御虎（故伊東祐勝の妻）、藩主伊東祐慶（すけのり）をはじめ、親戚の中にも多くのキリシタンがいた。したがって伊東マンショ神父の遺骨の掘り起しは1614年の9月以前、遺骨掘り起しの直後に飢肥へ運ばれたと推測される。

1614年11月7日以後説

1614年11月7日、長崎からマカオへ、11月8日、マニラへ、宣教師達と追放されたキリシタン達を乗せた5隻のジャンク船が出航した。翌日から長崎にある教会の取り壊しが始まり、11月15日頃、教会堂の取り壊しが完了した。

長崎奉行・長谷川左兵衛は長崎の教会の取り壊しに使っていた2000人位の下級役人を伴って有馬に赴き、有馬、有家、口之津へ通じる道を塞ぎ、キリシタン迫害を開始した。長崎奉行・

長谷川左兵衛は11月22日から3日間に口之津のキリシタン信者達22名を殺害した。しかし長崎奉行・長谷川左兵衛の下で働かされていた武士や役人達の主君である大名達は、自分の家来達が早急に自分の元に戻ることを求めたために、迫害は途中で中止になった。口之津での迫害の便りが長崎に届いたとき、聖ドミニコ会のオルファネール神父とルエダ神父は口之津へ向かったが警備が厳重なために町に入ることはできなかった。1年後スピノラ神父がローマに送った書簡に中浦ジュリアン神父が、キリシタン信者22名が口之津で殉教した時、その場にいなかったことを非難しているが、この時期、つまり11月9日から25日頃の期間、中浦ジュリアン神父は飢肥にいる藩主伊東祐慶（すけのり）の首席家老マンショの弟・ジェスト伊東勝左衛門を訪ね伊東マンショ神父の遺骨を届けに行っていた可能性が考えられる。中浦ジュリアン神父とマンショの弟・ジェスト伊東勝左衛門は有馬のセミナリオで幼い頃に共に学んでいて顔見知りだった。飢肥には母・町の上、姉・御虎（故伊東祐勝の妻）をはじめ、親戚の中にも多くのキリシタンがいた。中浦ジュリアン神父がどこで、いつの時点で自分が責任を任されている口之津教会の迫害の報告を受けたのか定かではないが、もし飢肥へ行っていたのなら、天草に戻るためには、二つの道が想定される。ひとつは飢肥から薩摩に戻り潜伏先である口之津へ向かうために天草下島へ渡り、徒歩で二江教会まで戻る道、（船で天草下島の本渡まで行き徒歩で佐伊津、御領を通り口之津の対岸、天草下島の鬼池地区の二江教会に戻る道）

二つめは、飢肥から都城を通って人吉、相良藩はキリシタンの多い土地であり、球磨川を降ってかつての宣教地である八代に出る道、八代からは船で天草へ渡る道。天草下島の鬼池地区の二江教会まで戻ってきた時点で、対岸の口之津での迫害を知らされたと考えられる。迫害が収まるのを二江教会で待ちながら口之津教会に戻る機会を伺っていたと思われる。

迫害の後、口之津教会に戻った中浦ジュリアン神父を待っていたのは、目の前で惨たらしく22名のキリシタン同胞を殺害され、迫害を経験して信仰が弱っていた多くの信徒達だった。神の言葉を語らない神父、神の御言葉を聴けない教会。信徒達が置き去りにされている教会。神の許しはすべての人に与えられる無償の恩寵であるはずなのに、神の許しを与えることを神父の特権の如く振る舞い、信徒達を無用な危険に晒させて殉教を強制する人命軽視の聖ドミニコ会のオルファネール神父とルエダ神父の姿勢に対して、人間的にも精神的にも十分成長した中浦ジュリアン神父は、島原、口之津の信仰の弱い信徒達の心の悩みを知り、理解を示し彼らの人命を尊重して神の許しを与え口之津の信徒達を殉教の危機から救い出している。

『迫害の後、聖ドミニコ会の二人の神父（オルファネール神父とルエダ神父）が口之津に姿を見せた。迫害の前に棄教した口之津の信者達が許しを求めたとき、聖ドミニコ会の二人の神父は許しを与えるために、奉行の面前で信仰を棄てた人は奉行所に行って棄教を取り消すことを条件にした。遅れて中浦ジュリアンが到着して、事情を聞いてジュリアンは自信を持って自分の意見を述べた。先輩である二人の神父とは異なるが、奉行所まで行かなくても心から悔い改めれば、誰でも許しを得ることが出来ると教えた。信者達は皆ジュリアンのところに告解をしに行った。その時ジュリアンが取った態度は賢明であった。弱さ故に落ちた人（棄教した信者）が奉行所でまた責められると再び落ちるに違いない。愚かに危険に入ってしまった人はならない。

深い理解を示したジュリアンは、その日から事実上口之津の信者の牧者となった。』

* 『天正少年使節の中浦ジュリアン』 結城了悟著 「16 奉行に打ち勝った港町」94 頁

信徒達に殉教を迫りながら自分達は殉教から逃げだす神父達。エルナンド神父は『キリシタンたちのなかには神父達が、背教より殉教を、と信徒には勧めながら、自分たちは殉教から逃避しているつつぶやいているものがあります。この誤解を解くために私はこの危険の中に蹴りこみたいのです。』と殉教の決意を述べている。全ての神父が勇気を持って殉教に雄々しく立ち向かったのではないこと、神父の中には心弱く殉教という死の恐怖から逃げ出した神父がいたことが解る。

* 『日本キリシタン殉教史』 片岡彌吉著 「5 大村に迫害の嵐」「4 神父の死と奉行朝長の立ち返し」、256 頁、

長崎から飢肥への道筋

(伊東マンショ神父の遺骨が運ばれた道筋についての考察)

考察 1、長崎の東側、山ひとつ越した港町が元教会領だった茂木港である。茂木港から船で対岸の天草の海岸沿いに鬼池、三角、八代へ上がり、球磨川沿いに人吉の相良藩に入る。**人吉の相良藩は、キリシタンに寛容な藩【隠しキリシタン】であり、家老の相良清兵衛(1568～1655)**は熱心なキリシタンである。多くのキリシタンが相良藩の庇護のもと信仰を守っていた。おそらく、中浦ジュリアン神父も相良藩家老。相良清兵衛とは懇意にしていたであろうと推測される。人吉からえびのへ下り都城を經由して飢肥へ入ったと考えられる。

* 驚愕の九州相良隠れキリシタン(前代未聞の歴史的真相) 原田正史著 人吉中央出版社

考察 2、長崎の東側、山ひとつ越した港町が元教会領だった茂木港である。茂木の港から船で天草の下島の西の海岸沿いを南下して、牛深、阿久根沖を通過して、川内川を上り、川内で下船、後、川内からは徒歩で、入来、加治木、国分、末吉、都城を經由して飢肥へ入ったと思われる。

【この反対の道筋は、1609年(慶長14年)ドミニコ会のモラーレス神父が薩摩川内市京泊りの丘の上に建っていた京泊り教会を解体して、長崎のサン・ドミンゴ教会として移築した時に使われた。薩摩川内で1608年11月17日に殉教した、税所七右衛門の遺骨もこの時に掘り起こされて長崎に運ばれ、サン・ドミンゴ教会に埋葬されている。現長崎市桜町小学校地下のサント・ドミンゴ教会跡地】

中浦ジュリアン神父にとって川内は1600年八代城陥落の時に逃亡したことのある土地である。関ヶ原の戦い(1600年9月15日)において、キリシタン大名小西行長が敗れ刑死したために、その領地肥後熊本の南半分(天草を含む)が競争相手であった加藤清正の支配下に移行した。八代の城主・ディオゴ小西美作は、すでに行長の弟・景行を処刑した清正の手に捕らえられないために薩摩に逃れることにした。彼と共に他の二人の武将も行ったが、天草の責任者だった

行長の家来でアンドゥレース小笠原、他の一人はヴァセンテ日比屋平右衛門であろう。彼らと共にキリシタン家臣 500 名とその家族（合計 1500 人）が薩摩への脱出への道を選んだ。60 隻以上の舟に分乗して薩摩川内の京泊に到着し、川内川を川内まで上り、ヴァリニャーノ神父の友人である一人の殿に迎えられて 2 回ミサを捧げ美作やその家臣達に秘跡を授けた。八代にいた宣教師 2 人、ジョアン・バプティスタ・バエザ神父とジョアン・フランシスコ神父が彼らに同行していた。修道士・イルマンは 3 人、伊予シクスト、三箇マティアス、一人は中浦ジュリアン修道士だった。美作一行がどこに落ち着いたかは不明だが、後に市来の港、江口（現・東市来）に俸禄を受けている。

* 『鹿児島のキリシタン』86～87 頁 パチエコ・ディエゴ著 春苑堂書店 昭和 50 年

小笠原玄也・みやの信仰と信頼

小笠原玄也・みや夫妻の神に対する信仰と信頼は 10 人の子供達への教育方針に表れている。玄也・みや夫妻は、将来自分達が殉教することを知りながら、それでも子供を産み育てた。子供の命とは神からの授かりものであり、神から預かった命と考えていた。命とは神の無条件の恵みであり、殉教も神からの恵みと確信して受け入れる覚悟をしている。この世の命の彼方にある神の賜る本当の永遠の命を信じ、子供の救いにも神にある永遠の命が必要だと信じ、その信仰を子供達に教えている。子供達も玄也・みやの信じている神を自分自身の神として受け入れて信じ、親子がともに人生を歩み、死を超えて神の元へ行くためにともに殉教した。小笠原玄也・みや・子供達の信仰は、熊本に於いて殉教した 1635 年（寛永 12 年）12 月 23 日までの 23 年間、1 度も変わることはなかった。

永遠に繋がる聖なる歩み・伊東マンシヨの生涯

伊東マンシヨ神父の司祭としての小倉での 4 年間は誠に充実した日々だった。38 歳から 42 歳の働き盛りの伊東マンシヨ神父の示した神に対する真摯な生き方と、迫害に雄々しく立ち向かった不屈の精神は、若い小笠原玄也（21 歳から 25 歳）のその後の生き方の指針となり、深い影響力を及ぼし彼の魂を魅了した。小笠原玄也が殉教の前に書き残した十五通の遺書を読むと、その中に伊東マンシヨ神父と同質の純粋な神に対する信仰と魂を見出す事ができる。伊東マンシヨ神父の死去後、熊本に於いて殉教するまでの 23 年間の間、貧困に喘ぎながら信仰を保ち続け、迫害の真中にあっても聖貧に生き、雄々しく殉教していった小笠原玄也は、伊東マンシヨ神父の生き様と信仰を確かに受け継いだ人だった。信仰を自分の生き方の中心に置いて自己を確立し、信仰の自由を最後まで守り通す強い意志を持ち、命を賭けて神の前に真摯に人生を歩み通した。

『わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとうした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けてくださるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。』 テモテへの第 2 の手紙 4 章 7、8 節

伊東マンショ神父も中浦ジュリアン神父も小笠原玄也も、人間の尊厳や人間の存在そのものまで疑わせるキリシタン禁教の時代にあって、キリスト教の信仰を自分のものとして受け止め、絶対に譲れない神を信じる信仰の自由、それに命を賭けて自分の生き方を神の前に問い続ける姿勢を持って日々を生きた。人生に於ける困難と迫害を神の御旨として受け止め、神という絶対者を信じ、神の境域にこそ永遠の命があると信じて生きた。それを信じて生きるためには確立した自己がなければならなかった。キリスト教を自分の生き方として受け止め、それを生きた人達と為政者との間に生じた確執の結果が殉教だった。殉教した人達とは、確立した自己を持ち、人間の生き方、信仰の高貴さや魂の優しさを証しする必要があったとき、ひとりの人間として神の前に真摯に生きることを選んだ人達だった。

中浦ジュリアン神父の殉教

伊東マンショ神父の死去後、20年間活動を続けた盟友の中浦ジュリアン神父は、伊東マンショ神父が残した全ての信徒達を自分の責任として受け入れ、迫害の中にある豊前のキリシタン達を慰めるためにたびたび訪れている。中浦ジュリアン神父は1627年頃以後、活動の場を口之津・高来から小倉に移している。おそらく細川忠利の寛容な庇護のもと小倉を拠点にして秘かに活動していたと考えられる。1632年（寛永9年）12月、細川忠利が肥後に移封された。小笠原藩が小倉に入ってきた後に中浦ジュリアン神父は逮捕された。領主が替わったことでキリシタンに対する庇護が失われたことが逮捕の原因になった。その後、長崎に護送され、翌年1633年（寛永10年）10月21日、西坂の丘に於いて殉教した。

カミロ・コンスタンチオ神父

1614年（慶長19年）マカオに追放の後、密入国して平戸・生月で布教に従事、その後、上五島の島、宇久島にて逮捕され、1622年（元和8年）9月15日、平戸の対岸、田平の焼罪岬に於いて火刑に処せられ殉教した。享年52歳。 現・平戸市田平町。

【参考文献】

伊東マンショの府内在住の場所・府内の教会

中世大友府内町跡発掘調査から

イエズス会史料によれば、1553年（天文22）に初めて建設された豊後府内の教会の敷地内にすでに墓地が設けられたとの記述がある。イエズス会は1556年（弘治2）に、隣接する敷地を新たに購入して、1557年（弘治3）に当所の敷地を病院と墓地に2分している。教会と病院の敷地内の墓地は初めから一貫して教会敷地内に存在していた。

『府内古図』が伝わっていて、その古い地図によれば教会のあった場所は、大友館の背後にあたり、寺院が集中する南北街路に面して『ダイウス堂』と記載された敷地がある。その場所はイエズス会の記述の場所と一致している。現大分市顕徳町付近である。

2001年（平成13）3月、JR大分駅の高架化に伴う中世大友府内町跡の発掘調査で、教会跡推定地の発掘調査が行われた。JR日豊本線線路下から、1基の墓が発見された。頭を北に向け仰向けに足を延ばし伸展葬の人骨が長方形の木管に納められていた。その後この周辺から合わせて18基の墓が発見され、教会の墓地の一角と断定された。この墓地の位置は教会推定地の南端にあたり、調査が進むにつれて1590年代の地層で覆われた1500年後期の埋葬であることも判明した。この発掘調査の結果、墓地の継続時期がイエズス会の史料からわかる教会の存続期間と一致すること、古図研究に基づく教会推定地と発掘された墓地との位置が一致することから、発掘された墓地は豊後府内のイエズス会府内教会の敷地内に設けられた墓地の一部と断定された。

府内古図の街並み

府内古図に描かれている府内は、『大友館』を中心に、碁盤の目状に東西に5本、南北に4本の街路が通り、38カ所の町名と20カ所の寺社名が記載されている。

この地図は府内古図と現在の大分市地図を重ね合わせて、南北の街路を東の大分川沿いから第1南北街路、第2南北街路、第3南北街路として、最も西側の街路を第4南北街路と仮称している。さらに東西に走る街路については現『名ヶ小路町』は『名ヶ小路』、『横小路町』は『横小路』とそれぞれ町名にちなみ、街路名としてある。

大分川沿いの第1南北街路沿いには『上市町・工座町・下市町』等の町名があり、この場所は商工業者が居住して活動した場所と想定できる。大分川沿いには第1南北街路を遮断するように府内最大の寺院である『万寿寺』があり、その南に寺小路町がある。

大友館の東北側の第2南北街路沿いには『唐人町』があり、中国大陸や朝鮮半島出身の異国人々が居住していたと考えられている。

更に、第4南北街路沿いにある中町の裏には『ダイウス堂』と記載されたキリシタン教会の場所があり、その名称は『デウス』と当時呼ばれていたキリストを表わしていて、この場所にキリシタン関係の施設が建ち並んでいたことが推測され、発掘調査によっても、この場所がキリシタン施設であったことが確認されている。

第4南北街路沿いの『上町・中町・下町・林小路』大友館前の『御所小路町』や『御内町』等は、大友氏の家臣団が居住していた武家地と考えられている。

賢順も大友宗麟よりこの地区に館をもらい居住していたと考えられる。

大友宗麟の嫡子・義統が『文禄の朝鮮の役』文禄2年（1592年）で失態を犯し、領地豊後を没収され、別府石垣原の戦いで黒田官兵衛孝高に敗れて、秋田、常陸と流されて、常陸国水戸で幽閉中に書き残した『当家年中作法日記』には、大友館で行われた儀式や館に勤務する人々の様子が描かれている。その中に『同朋衆』や『猿楽衆』と言った芸能集団が描かれている。この日記によれば、この時代の大友館には、南にハレの接客空間、北にケの日常の生活空間が

配置されていた。ハレの空間は主殿を主とする儀式空間と、庭園を巡って展開する会所を中心とする饗宴と、茶・花・香・連歌等の遊芸空間から成っていた。賢順もこのハレと呼ばれる空間、接客殿および遊芸空間において、儀式に伴う饗宴、接客に伴う饗宴のために、箏を演奏していたと考えられる。

* キリシタン大名の考古学 別府大学文化財研究所企画 2 思文閣出版

* 戦国大名大友氏と豊後府内 鹿毛敏夫編 高志書院

* 大友宗麟の戦国都市・豊後府内 玉永光洋・坂本嘉弘著 新泉社

高田重孝

880-0035 宮崎市下北方町横小路 5886 - 3

0985・25・5467 Fax 0985・22・3628 携帯 090・5933・4972

Email Shige705seiko214@outlook.jp.